

ISSN 2189-3268

大学連携会議「学輪 IIDA」

機関誌 「学輪」

第6号 2019

飯 田 市

大学連携会議「学輪IIDA」

機関誌「学輪」

第6号 2019

1 機関誌「学輪」（第6号）発刊にあたり

P. 3

飯田市長 牧野 光朗

2 学輪IIDAの取組

大学連携会議「学輪IIDA」全体会（公開セッション）

P. 5

「知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について」

【ファシリテーター】 和歌山大学観光学部 教授 藤田 武弘

【事例報告】 立命館大学政策科学部 教授 平岡 和久

名城大学都市情報学部 教授 福島 茂

松本大学総合経営学部 専任講師 田開寛太郎

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

3 論説

社会構造と住民参加からみる山村の地域諸集団の実態

P. 25

－飯田市上村地区程野集落を事例にして－

東京農工大学大学院 農学府 佐藤 周平

東京農工大学大学院 農学研究院 教授 土屋 俊幸

東京農工大学大学院 農学研究院 講師 竹本 太郎

4 研究ノート

りんご並木をめぐる「モノガタリ」の形成と教育的価値に関する研究

P. 37

東京農工大学大学院 農学府 能塚 康介

東京農工大学農学研究院 教授 朝岡 幸彦

5 大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

P. 47



機関誌「学輪」(第6号) 発刊にあたり



飯田市長 牧 野 光 朗

学輪IIDAは、大学研究者同士が4年制大学を有しない「飯田」を起点に相互につながり、専門的な知見や外部の視点を生かしたモデル的な研究や取り組みを地域とともに行っていく有機的なネットワークであり、そのコンセプトは「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」です。平成23(2011)年1月の設立以来、様々な取り組みを通じてメンバーは増え、現在60の大学・高等教育機関、研究機関から131名の方にご参加いただくまでに成長いたしました。

本機関誌「学輪」は、当市において展開される大学関係者と地域との連携による教育・研究・調査活動等の実績を発信することにより、より多くの方に学輪IIDAの活動を知っていただくことを目的として発行しております。

本号の発刊にあたり、編集局を務めていただきました和歌山大学をはじめ、多くの学輪IIDA関係者の皆様のご協力に対し、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

当地域では、昨年11月、名勝天龍峡にかかる天龍峡大橋を含む三遠南信自動車道の天龍峡IC・龍江IC間が開通し、2027年開業予定のリニア中央新幹線とともに地域内における交通基盤の整備が進んでいます。また昨年1月からは、「産業振興と人材育成の拠点(エス・バード)」において、公益財団法人南信州・飯田産業センターが本格的に運営を開始し、新たな雇用創造に繋がる産業振興と人材育成を進めています。

リニア中央新幹線の開業により、スーパーメガリージョンが形成される時代を迎える中、リニア将来ビジョンが掲げる「小さな世界都市」「田園型学術研究都市」の実現に向けた大きな一歩を踏み出すこととなりました。

持続可能な地域づくりには人材のサイクル構築が欠かせず、当地で進めている地域人教育が高校生の育ちに大きな成果をもたらしています。学輪IIDAにおいても、実行委員会の体制で高大連携に取り組み、昨年は市内全ての高校から延べ79名の高校生が大学生と一緒に学ぶフィールドスタディに参加いたしました。この取組が、全国の高大連携のモデルともなりうる先進的なものとなり、また学輪IIDAが有する知見を飯田へと還元することにつながればと、一層の充実を期待するものです。

学輪IIDAメンバーの皆さんにおかれましては、今後もそれぞれのお立場から知見やネットワークをご提供いただき、魅力的で持続可能な地域の実現に向け引き続きのお力添えをよろしくお願い申し上げます。機関誌「学輪」第6号発刊にあたってのあいさつとさせていただきます。



大学連携会議「学輪IIDA」全体会(公開セッション)

平成31年1月26日(土)

「知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について」



○事務局

これより全体討議を開催いたします。

開催にあたりファシリテーターを紹介いたします。和歌山大学観光学部長、藤田武弘先生です。藤田先生のご専門は農業経済学で、農山村再生、都市農村交流、グリーン・ツーリズム、六次産業化などを研究テーマとされています。

学輪IIDAのメンバーであり、これまでも当地域における地域再生、特に農山村再生に関わる体験修学旅行やワーキング・ホリデーに関する調査・研究等に取り組まれています。

○藤田教授（和歌山大学）

本日のテーマは、「知のネットワークを活用することで地域の人財をどう育成していけるのか」という非常に大きなテーマです。イノベーション社会をつくりあげる地域の担い手育成に向けて、大学、高校、地域それぞれがどのような役割が果たせるのか、どのような連携が可能なのか。

特に今年度、長らく懸案であった高大連携のフィールドスタディについて、高校生と大学生とが一緒に学ぶフィールドスタディとして実現することができました。加えて高等学校の先生方にも参加をしていただき、高校生、大学生それぞれの成長を見届けていただきました。それらをご報

告いただきながら、この「地域人財育成」の可能性を皆さんと共に考えていきたいということです。

この間、高大連携として様々なカリキュラムづくり・発表の場づくりがありました。それを「こういう学びのスキームを作った」ということだけで終わらせず、将来を見据えた日本、アジア、あるいは世界のこれからを担っていく未来の大人たちをどのように輩出していくのかという視点から見て、今、学輪IIDAあるいは我々に問われていることは何なのかについてご意見をいただきたいと思っています。

高校生がふるさとの地域課題と向き合う体験をしながら、地域への思いがどのように育まれ、それが大学あるいは社会に出てからの学びを通じて地域あるいは広い意味での世界との関わりでどのような化学変化を生み出してくれるのだろうか和我々も期待していますし、そういった人の流れがこのふるさとである飯田に環流されることが、今後の地方都市の新しい時代、本当の意味での地方創生につながっていくだろうと考えております。

大学側の大きな課題として、大学の地域連携というのは果たしてどのようなことができるのかということが問われてきています。その辺りの可能性を含めて、今後学輪IIDAに何ができるのかということについて、ぜひ忌憚のないご意見をいただければと思っておりますのでよろしくお願いします。

これから事例を幾つかご報告いただき、その後、大きく2つの柱で意見交換をしていただきたいと思います。1つは、大学あるいは高校それぞれの立場から、地域連携に関わることの可能性、あるいは実施してみたい課題についての意見を深めていただくことです。当然高校は、普通科から商業系、工業系、農業系含めて多様な学びの形態がありますし、大学も国公立、私立があり、この学輪IIDAも非常

に多様な先生方がご参加いただいています。そういった高校生、大学生たちの多様な力をどのように引き出していけば良いのか。

2つ目の柱として、特に牧野市長から、地域人教育に対してどのような期待を持っているのかという話を切り出していただきながら、これに対してこの学輪IIDAがどのように関わっていけば良いのかということについて、意見をいただきたいと思っています。

それでは報告からお願いしたいと思います。まずは1つ目の報告です。共通カリキュラムフィールドスタディと高大連携の概要について、立命館大学政策科学部の平岡教授からお願いします。

○平岡教授（立命館大学）

学輪IIDAの中で共通カリキュラムを構築するという1つのプロジェクトを6年間行ってきました。このプロジェクトは、学輪IIDAが立ち上がった頃に、飯田を訪れる多くの大学関係者が色々な側面から把握した飯田の価値が共有化されているのだろうかという話になり、そこから飯田の価値を発見して共有化する共通のカリキュラムをつくれないうか、それを通じて地域と大学が連携して共に学び合う場をつくれないうか、ということから始まったものです。それから6年間、夏のフィールドスタディを中心にモデルカリキュラムづくりと実践を行ってきました。そして、このプロジェクトである程度かたちができたので、昨年の学輪IIDA全体会内部討議で、実行委員会方式に変えることを提案しました。

実行委員会方式は、人形劇フェスタをはじめとして、飯田市の地域づくりの非常に特徴的なスタイルです。この共通カリキュラムでもそうした方式に移行し、高大連携をしっかりと図り、モデルプログラムづくりから本格展開に移行したいと提案して議論しました。こちらがこの6年間で実施してきた導入科目、展開科目を中心に図にしたものです。実践科目は、各大学やゼミで実施してきた、様々な実践的なプロジェクトを位置づけています。



昨年、実行委員会への参加を呼びかけ、13大学、研究機関、飯田市内5高校が参画し開催された2回の実行委員会は、牧野市長みずから出席されて議論に参加していただきました。4月に開かれた第1回実行委員会で、各大学や高校の状況や問題意識、ご意見をたくさんいただきました。その中で、導入科目や展開科目、そして実践科目について可能性を探りながら、これを受けて取り組みたい大学、高校で分科会を形成し、それぞれでプログラムづくりを進めました。

その結果、導入科目としてソーシャルキャピタルフィールドスタディ、展開科目として地域経済フィールドスタディ、実践科目として遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディを実施することができました。特に導入科目と実践科目では、高校生がフルに参加するとともに、高校の先生方もプログラムづくりと授業の実践にご参加いただき、高大連携元年にふさわしい連携ができた年になったのではないかと思います。

全てのフィールドスタディ終了後、10月に第2回の実行委員会を行い、実施報告と今後の取り組みを検討しました。共通カリキュラムフィールドスタディの今年度の成果は、初めて導入科目、展開科目、実践科目を実行委員会方式の中で実施できたこと、導入科目、実践科目で高校生が本格的に参加し、大学教員、高校教員の協働が実現できたこと、そして、導入科目としてのソーシャルキャピタルフィールドスタディが、非常に完成度の高いプログラムで実施されたということです。

課題としては、参加する大学生にとって導入・展開・実践という体系的な学びを十分保障できていないということ、そして、初めて本格的に参加していただいた高校生、ある

いは高校側のニーズに応えたカリキュラムをどう展開していくのかということが挙げられます。それらを踏まえ、高大連携のさらなる展開に向けて議論を深めてまいりたいと思います。

1つは、高大連携で行うアクティブラーニング型の実践科目として非常に成果が上がった遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディについては、今後多様な可能性があり大いに期待できるものではないかと思っています。

それから、導入科目のソーシャルキャピタルフィールドスタディは高校生が理解でき、また非常に良い刺激になるということが示されたのではないかと思います。

共通カリキュラム以外にも模擬講義や、ICTを活用して参加型学習を開始するなどのアイデアも出ています。フィールドスタディ以外の高大連携をどう展開していくか、さらには、フィールドスタディと地域人教育、地域学習といったものをどう連動させて効果を上げていくかということも模索できればと思います。

学輪IIDAを基盤として、地域人材育成の視点から高校と大学の組織的な連携を今後どう進めていくかという大きな課題に対して、今後本格的に検討していきたいと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございました。引き続いて、ソーシャルキャピタルフィールドスタディについて、名城大学都市情報学部の福島教授からお願いしたいと思います。



○福島教授（名城大学）

ご紹介に預かりました名城大学の福島と申します。

まず、私たちがこの飯田でソーシャルキャピタルというものを学ぶ意味についてお話をしたいと思います。一番

の関心は、「飯田ではりんご並木、人形劇フェスタ、公民館といった全国的に有名な市民活動が盛んに展開される、その秘密はどこにあるのか」という点です。その背景には豊かなソーシャルキャピタル、社会的関係資本が蓄積され、それが多面的な市民活動に表出しているのではないかと考えました。

ソーシャルキャピタル研究の第一人者のパットナムは、「お互い様」という互酬性の規範や人と人とのつながりが発展し、それを支える社会的な仕組みがあれば、共通の目標や協調的な行動が生まれやすく、社会的な目標が達成しやすくなると指摘しています。これはまさに、これまで飯田がやってきたことそのものです。参加学生・生徒がこれを確認・実感することがこのフィールドスタディの狙いです。

豊かな市民活動には豊穡な社会的な土壌が必要です。私たちはついその果実やそれを育てるための方法・アプローチに目がいきがちですが、実際にそういったものを生み出すためには、社会的な土壌というものが非常に重要です。それは大学の教室では実感することができないため、フィールドに出てそれを学ぶ必要がある。そこで私たちは飯田に来て学ばせていただいているわけです。

このフィールドスタディでは、まずソーシャルキャピタルの概念を理解し、そして、フィールドに出て実際の市民活動の事例調査を行い、その結果を発表しあってソーシャルキャピタルと市民のまちづくりの関係を理解するという目標を立てています。

今回は高大連携として、特に高校生が大学生とともに自らの地域を学び、その地域の可能性を知る機会をつくりたいと思いました。それが飯田市の提唱する地域人教育に資するものであれば、私たちも非常にやりがいがあると考えています。

このプログラムは8月17日から20日までの4日間で行い、2泊3日のフィールドスタディの後、農家民泊等を通して様々な教育体験をするという内容で実施しました。4大学48名の大学生と下伊那農業高校、飯田女子高校合わせて5名の生徒が全行程に参加し、さらに飯田風越高校を含めた18名の生徒が、牧野市長の講義等に部分参加しました。

プログラムの構成としては、全体講義として市長から飯田のまちづくり・地域づくりについてのお話をさせていただき、私からソーシャルキャピタル概論を講義させていただ

きました。また、飯田のシンボルであるりんご並木や人形劇フェスタ等の経験を通してソーシャルキャピタルを考えるワークショップや、地域自治の仕組みについての講義、公民館主事から飯田の公民館を学ぶ機会を設けました。そして、メインの事例調査では5事例を10班に分かれて調査し、全体発表会を行いました。

事例としては、閉園になりそうな保育園を地域自らが引き受け、デイケアセンターも運営している千代しゃくなげの会、橋北地区の歴史、文化といった様々な資源を生かしながら活性化をしている橋北まるごと博物館研究会や橋北面白倶楽部、また、天竜川鷺流峡の環境整備を中心として、それを子どもの学習にも展開している天竜川鷺流峡復活プロジェクト、南信州獅子舞フェスティバル実行委員会、そして南信州のリングを使った発泡酒造りで地域を活性化する国際りんご・シードル振興会から学ばせていただきました。

私どもは、それらの市民活動のプロセスに着目し、「活動自体を成立させる狭義の要因構造」「その背景にあるソーシャルキャピタル」そして、「ソーシャルキャピタルのネットワークの中で位置づけられていく、あるいは巻き込まれる飯田の豊富な人的資源の関係」という「3つの成立条件」を意識するよう学生に指導してきました。

学生たちは地域活動のリーダーからその経緯や活動内容、苦労や達成したことなどを聞き取り、それらを、各大学、高校生混合のチームでとりまとめ、最後の発表会で、5つの事例の経験交流を行いました。

例えば、千代しゃくなげの会では、全世帯が1万円を出し、また様々なネットワークを使い住民自ら1,000万円ものお金を集めて自分たちで保育園を運営することができるその秘密について聞いてきました。その中で、当事者意識を持つ人たちの存在、自治会などの地縁的な仕組み、そのほかまちづくり委員会、飯田市、ふるさと千代会などのネットワークの中で自分たちの貢献が自分たちの地域を支え、それがまた自分たちの生活を豊かにしていくという、互酬性があるということを確認してきました。

また、国際りんご・シードルの振興会では、「なぜ、わずか5年間でシードルの醸造所が5カ所に増加し、りんご農家による委託醸造のシードルが20種以上も生まれ、あるいは、pom・ド・リエゾンというシードルの知識を持つ資格

認定者が126名も生まれるような動きが成し遂げられるのか」といった疑問を持って地域に入りました。その中で、飯田の人たちは、誰かの「やってみたい」という声に社会的な意義を感じればそこに集い、実行委員会のようなものを組織化して一気に物事を成し遂げていくということがわかりました。

これらの調査の中で、特徴的な飯田の歩みを確認し合ってきました。具体的には、リーダーと身近な支援者の存在があり、地域で共感される社会的な目標が掲げられることで、互酬性の規範や豊かなネットワークの中で組織化がなされていること。公民館活動や自治会で、運営スキルを持った人たちが共創の場をつくりながら運営をしているということ。そのうえで、市役所の支援、市民の資金提供、あるいは内外の人材の巻き込みといったことをしていきながら社会的な成果を生み出すということを確認しました。

9割前後の参加大学生および高校生から、今回のフィールドスタディについて肯定的な評価をしていただきました。地域人教育という観点からお話をさせていただくと、高校生は、最後のレポートの中で「地元の理解や魅力の発見、地域づくりへの理解につながり、大学の学びにも触れることができた」、その結果、「地域への関心を持ち、地域づくりへの意欲を持った」、「大学の学びへの関心が高まった」と言っており、このことが大学生にとっても非常に大きな刺激になりました。また、全行程に参加した高校生は5人だったため高校生が入らない班もありましたが、「うちの班にもぜひ高校生が欲しかった」という声も聞かれました。

最後に、このセッションのテーマである「イノベーション社会の形成に向けた地域人財育成の可能性」について、このフィールドスタディが持つ意味を簡単に振り返ってみたいと思います。このフィールドスタディは、社会的なイノベーションを生み出す社会的土壌をしっかりと見極めるものであり、飯田という地域は、そういった土壌の中で人的資本が蓄積され、何か動きをおこす際に非常に高いポテンシャルを持った地域であるということを理解できたと思います。

また、飯田には社会の問題を解決していくロールモデルとなる人がたくさんおり、そういった人からの刺激を受けながら、自らも地域づくりへの参加姿勢を持つことができるようになっていく。そして、1度は外に出てもまた戻っ

てきて、自分たちの地域を、当事者意識を持って魅力的にしていきたいと考えるようになる。そこに、地域としての大きな魅力があると感じていくのだと思います。

何よりもイノベーションは、実践の中で多様な人が協力し合うことによって、様々な知恵が融合して生まれます。このように、飯田は非常にイノベーションを生みやすい地域であるということを理解することでできれば、今回のフィールドスタディを実施した意義があったかなと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

福島教授ありがとうございます。

引き続き、もう1事例を大学の側からご報告をいただきます。遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ2018をご担当いただきました松本大学総合経営学部の田開講師をお願いします。

○田開講師（松本大学）

ご紹介いただきました田開と申します。私の専門は環境教育で、過去に山梨県清里高原にあるキープ協会では自然案内の実習生をやっていました。早速ですが、活動の事例報告をさせていただきます。

このフィールドスタディは9月に2泊3日で行い、大平保養センターを宿泊拠点に高校生と大学生が集まって活動しました。参加学生は、松本大学1年生が4名、東京農工大学大学院生が4名、そして京都外国語大学1年生が3名、飯田OIDE長姫高校3年生が6名、飯田女子高校1年生が2名でした。

プログラムは、1日目、2日目にフィールドワーク、そして3日目のまとめ発表会という流れで、フィールドワークは4つのグループに分かれて10時から17時、地域の中を歩く活動をしました。

事前学習は、下栗の里のツアーとしてガイドさんにお話をいただき、また、飯田市美術博物館客員研究員の坂本先生からジオパークの基本的なお話、また、地元の猟師さんである益山さんから現地の産業のあり方をお話いただきました。最終的にはまとめ発表会に地域の方も来ていただいて、遠山郷のすばらしさを再発見できたプログラムでした。

フィールドワークとしては、大平保養センターを拠点として旧木沢小学校から和田宿の大体4キロ弱ほどを歩き、

また、部分的には車で移動しながらの調査になりました。

始めに、災害をたどるグループは、ジオパークガイドの吉村さんに一緒に行動をしていただいて、木沢の三大構造線のような、ここで見られないかなりマニアックな地質学的・専門的な知見からの案内をいただきました。

2つ目の霜月祭りのグループは、木沢の八幡宮神社、小道具の熊野神社、和田諏訪神社、そして八重河内の八幡社の4つを回り、特に小道具の熊野神社では、瀬川さんとして活躍されている方から直接お話しいただき、貴重な時間を過ごさせていただきました。

3つ目のグループは遠山郷の生業ということで、1日目にお話いただいた猟師の益山さんに鹿の解体を見学させていただき、大島地区の茶畑や和田のジビエ、神楽の湯のトラフグの養殖について、聞き取りを行いました。

最後に4つ目のグループは地元ガイドの山崎さんと一緒に秋葉街道をたどり地域の歴史を学びました。このグループはメンバーが足をヒルにかまれるという野外活動のリスクを身をもって体験したグループでもありまして、道中きれいな杉並木を通ったり、地域の方が小学生のところに落雷があって根元だけが残った木の話なんかも伺いながら歩きました。

秋葉街道は信仰の道や芭蕉の道で有名ですが、地域の思い出の道としていろいろなお話を聞きながら回ることができ、どのグループも地域の方あってのフィールドワークになったということが上げられます。

ここからは学生の感想をピックアップして、報告させていただきます。

本学からは4名の学生が参加しました。本学は県内の出身の学生が多いのですが、長野市、千曲市、須坂市の出身の子は遠山郷のことを知らず、かなり本格的な服装で臨みました。結果としてかなり歩くことになり、本格的な備えがあってちょうど良かったという感想も得られました。

2泊3日は自炊をしましたが、地元のスーパーで買い物をした際にジャムすら売ってなかったということなどからも、地域の様子を学んだのだらうと捉えております。バーベキューなどで交流も深めました。

大平保養センターは携帯の電波がなく、最初はスマホが使えないことに不満がありましたが、結果としていろんな人との交流ができました。本来であれば飯田市の皆さんに

「もっと設備を良くしてください」とお願いをするところですが、あえてこのままにしていだければと思っています。

高大連携の教育的意義についても、学生からは多年齢、多大学との交流ができ非常に良い成果を得たという感想があります。グループの構成は高校生1年生から大学院生を満遍なく置き、学校の枠を超えた学びの場ということを重視しました。また、地域の方の協力あつてのフィールドワークということで、本学の学生にとっても地域の方々の活動が新鮮でおもしろかったという感想がありました。あえてこの活動の特徴を挙げるとすれば、「高校生、大学生の垣根を超えた対話と協働が非常に平等なたちでできた」ということであり、大学生からの一方的な指導ではなく、高校生からも学ぶことが多かったということもありました。また、地域そのものを対象とした教育についても、参加された高校生が地元の自分の足下をしっかりと見つめ直すきっかけになったと思っています。

最終的な報告としては、大学生と高校生が協力し、発表会に向けていろいろな準備をしました。それに対して地域の方から「成果物を地元の方にもたくさん見てもらったほうがいいよ」とありがたい言葉をいただきまして、現在は旧木沢小学校に展示をさせてもらっています。そのほかにも発表させていただく機会を幾つかいただき大変感謝しています。

併せて、エコパーク・ジオパークの研究者で、50年近く遠山郷を調査研究されている坂本先生から最後の講評をいただき、「知らない情報があつて新しい発見があつた」と大変うれしい言葉もいただきました。地元の高校生の感想を聞いていると、始めは「自分の地元だから今さら何を知るんだ」という後ろ向きの気持ちが、最終的な発表、共有の時間では、「地域外の人が自分の地域のことを真剣に調べてくれたといったことに感動した」と変化していったことも私にとって非常に印象的でした。

最後に、多様な高校・大学の中でいろいろな視点、価値観の共有ができたことは学生にとって新鮮な学びがあり、ありがたかったと思います。自分磨きから地域磨きへといったことにおいては、「地域で何かしたい」と本大学に入ってくる学生がほとんどで、来年度の迎え入れる学生の6割方が指定校推薦やAO入試などで決まっています。ただ、「地域で何かしたい」といってもその地域の輪郭がほん

やりしている中で、この参加を通して地域に対しての今後の明確な期待を持てたことが、大学生の学びとして非常に良かったと思います。

今後の課題としては、次年度も引き続きより良いものにしていくために、専門家の方、地域の方の協力のもと、エコパーク・ジオパークについての研究調査をどのように行っていくのかということ積み上げていくことに併せて、本学、また京都外国語大学は観光系を志望する学生が多いので、具体的な遠山郷への観光振興につなげていくこと、これから着地型振興を進めるための制度整備も進んでいるので、高大連携としてそういった具体的な資格取得に向けたカリキュラムなども作れるのではないかと思います。

最後になりますが、遠山郷の皆様、そして、飯田市職員の皆様に改めて感謝申し上げます。

○藤田教授（和歌山大学）

以上、大学の側からのご報告をいただきました。引き続きこの高大連携のプログラムに参加いただいた高校の側から、実際に参加した高校生からの発表も含めまして、まずは南信州広め隊、飯田OIDE長姫高校からお願いしたいと思います。



○山下さん

これから南信州広め隊の発表を始めます。メンバーは渡邊、吉川、熊谷、柳瀬、宮崎、山下、よろしくお願いします。

突然ですが皆さん、全国観光客数ランキングで長野県が何位か知っていますか。なんと47都道府県中10位なのです。このランキングで長野県が上位に入っていることがわかりますね。

全国観光客数ランキングで10位に入っている理由として、

観光客が白馬でのスキーを楽しむこと、上高地や軽井沢などの豊かな自然で楽しむこと、ソバやキノコなどの長野県のおいしい物を食べることなどがあります。

では、皆さんにもう1つ質問したいと思います。長野県内地域別観光客数では、10地区中、私たちの住む南信州は何位なのか知っていますか。残念ながら9位なのです。

これは長野県観光課のデータです。観光客が長野県のどの地域に立ち寄るか表した図です。この図を見ると観光客は主に北信や中信に集中しており、私たちが今住んでいる南信州に訪れてくれる観光客がほとんどいないことがわかります。

○渡邊さん

南信州には天竜舟下りや下栗の里など、こんなに魅力的なものがたくさんあるのに観光客はその魅力に気づいていません。そこで活動のターゲットを観光客に絞ることにしました。なので、私たちは地域外に南信州の魅力を伝えれば、観光客が増え、ほかの地域に負けないぐらい活気づくのではないかと仮説を立て検証することにしました。

検証するにあたり、私たちは3つの作戦を実行することにしました。それはデパートゆにと、遠山フィールドスタディ、えばら観光フェアに参加することです。

○宮崎さん

作戦その1、デパートゆにと、デパートゆにととは、県内外の商業高の生徒や地域の特産物などの地域で商品開発を行い、実際に自分たちの手で商品を販売するという活動です。これは南信州の魅力を広く伝えることのできるチャンス。早速私たちが食材を探してみることにしました。

南信州の特産物を調べて挙がった食材は、五平餅、市田牛乳、アルプスサーモン、下栗芋、鹿肉、千代幻豚です。これらの食材を使った商品案を幾つか考え、商品化してくれる企業さんを探しました。

私たちの商品案を実現してくださったのがPAL'Sさん、キッチンかのんさん、HOTA pastryさん、西洋割烹吉祥寺さんです。何回も打ち合わせ、試作品作りの末、とってもおいしそうな商品たちが完成しました。

○吉川さん

1つ目の商品はガレットです。ガレットは2種類あり、1つはアルプスサーモンとクリームチーズを使ったちょっと大人の味のスモークサーモンガレット、もう1つのガ

レットは、南信州でとれた夏野菜をたくさん使ったラザニア風ガレットです。価格はどちらも250円で、協力企業は西洋割烹吉祥寺さんです。

2つ目の商品は、下伊那牛乳プリンです。これは今年のバレンタインフェアで人気だった商品を夏バージョンにリメイクしたもので、上にソーダゼリーを乗せました。価格は420円で、協力企業はHOTA pastryさんです。

○山下さん

3つ目の商品は五平餅バーガーです。この商品は飯田の伝統料理である五平餅をバンズにし、パティにはブランド豚の千代幻豚を使用しました。五平餅の認知度の低い若い世代に気軽に食べてもらえるようバーガーにしました。価格は700円で、協力企業はPAL'Sさん、在来屋さん、岡本養豚場さんです。

○柳瀬さん

4つ目の商品は秘境めしです。協力していただいたキッチンかのんさんから、南信州のおいしい食材をたくさん紹介していただき、その中から9つの食材を厳選して1つのお弁当にしました。遠山のジビエである鹿肉を使ったハンバーグや、高級きのこのタマシロダケのソテーなど、南信州の味をぜいたくに楽しめるのが特徴です。価格は1,850円で、協力企業はキッチンかのんさん、星野屋さんです。

○渡邊さん

夏休み最後の3日間、松本の井上百貨店さんの会場をお借りし、実際に販売してきました。ただ売るだけではなく、飯田の魅力を伝えられるよう写真のようにディスプレイやポップを工夫しました。

お客様の中にはジビエに抵抗を持っていた方もいて、なかなか商品を手に取ってもらうことができませんでしたが、試食を食べていただくことでジビエの味を知り買ってくれる方もいてうれしかったです。

初日は金曜日の平日だったこともあり思うように売れない商品もありましたが、残りの2日間で仕入れた物はすべてが完売し、大成功に終わりました。

後日、デパートゆにとに来てくださったお客さんから1通の手紙をいただきました。手紙には私たちがお客さんにどのような影響を与えることができていたのかや、今後さらに良くしていくためにはどうすればいいかなどのアドバイスが書かれていました。

今後の活動に向けて、活力をいただくことができ、次の活動に生かすべく私たちが行ったのはこちら。

○熊谷さん

作戦その2、遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ、私たちが活動を通して調べている中で、長野県に観光で訪れている人の多くは自然を求めていることがわかりました。南信州で自然が多い場所といえば9割山に囲まれている遠山地区です。そこで自然を自分たちの肌で感じ魅力を学ぶために、遠山地区で行われるフィールドスタディに参加しました。

今回は学輪IIDA、松本大学、京都外国語大学、東京農工大学協力のもと、飯田女子高校などの生徒も含め、2泊3日で遠山地区を調査しました。

1日目は下栗の里を実際に歩き、地域の方からこの下栗地区の環境、暮らしなどのお話をお聞きしました。2日目はグループごとに分かれ、各調査テーマに基づき現地調査を行いました。鹿の解体作業の体験や登山のような道を歩き、ヒルに食われてしまうなど、おのおの初めての経験を味わうことができました。この日は地域をたくさん散策したので多くの人と関わり、この地域に住んでいる人の思いを知ることができました。

○宮崎さん

3日目は最終日ということで、グループごと調査した内容をまとめ、1日目と2日目にお世話になった方をお呼びして発表しました。自分の調査をしていないテーマの内容もほかのグループの発表を聞くことでよく知ることができました。

この3日間の成果として、実際に地域に入ってみないとわからない魅力もあるということ、地域の人の本音を聞き、伝統などを受け継ぐ後継者不足であることを知りました。南信州の魅力を自分たちの目で感じることができたので、今度はこの魅力を県外へ発信しようと思いました。

○熊谷さん

そこで作戦その3、えばら観光フェア、品川と飯田市は2027年のリニア開通でつながります。そのため一足先に飯田市の魅力を品川の人に伝え、開通後に少しでも多くの人に訪れてもらえるように飯田の特産品を販売してきました。

私たちが品川で販売した商品はこちら、南信州で有名な物ばかりです。当日は観光フェアということもあり多くの

人が訪れていました。その中で、飯田出身の方が来てくださったり、朝ドラの影響もあってか「五平餅、ああ知ってるよ」と話してくれる方もいました。

2日間、それぞれ異なる場所で販売活動を行い、飯田の魅力を品川の人に知ってもらうことができました。

○吉川さん

このように私たちの活動はさまざまな場所で行ってききましたが、アンケートなどは取っておらず正確なデータを得ることができませんでした。なので、仮説が検証できたかどうかは確認できませんでした。

これまでの3つの作戦を通して私たちのグループでは、成果として松本や品川の方たちに魅力を伝えたとともに認知度も確認することができました。

反省点は、販売場所に訪れてくれた人にしか広められなかったことです。しかし、今回販売という方法で南信州の良さを伝えてきて、高校生の私たちでもこの地域のためにやれることが幾つもあるのだと実感できました。

○柳瀬さん

私たちは販売活動や地域のイベントに参加をし、どこの班よりも多くの地域の人、地域外の人と関わってきました。そういった経験を通し、地域に対する考え方や自分の意識が変化しました。伝えることの大切さ、難しさを経験し、私たちは今までより大きく成長することができました。今までやってきたこの活動、今後の生活、地域のために生かすことで、私たちの大切なこの地域を守っていきたいと思います。

今回協力してくださった企業さんたちは一度も断ろうとせず、とても積極的に私たちの商品開発に協力してくださいました。改めて地域の人の温かさを感じることができ、こういった地域性も南信州の魅力だと思います。

これで南信州を広め隊の発表を終わります。礼。

○藤田教授（和歌山大学）

長姫高校の皆さんありがとうございました。

それでは、もう一方お願いしたいと思います。ソーシャルキャピタルフィールドスタディにご参加いただいた下伊那農業高校、それから飯田女子高校の生徒さんたちです。

よろしくお願いします。

○寺澤さん

これから学輪IIDA共通カリキュラム ソーシャルキャピ

タルフィールドスタディ活動報告をします。

まず自己紹介をします。飯田女子高校の寺澤真生です。

○伊坪さん

下伊那農業高校の伊坪星奈です。

○富井さん

飯田女子高校の富井萌です。

○大沢さん

飯田女子高校の大沢佳歩です。

○寺澤さん

よろしくお願いします。

次に、私たちが参加したきっかけをお話します。私は、約1年前から飯田市で行われたリニア駅周辺整備市民ワークショップに参加する機会がありました。そこでは、よりよいリニア駅空間を目指して地域の方と話し合いをするのですが、その中で私は「高校生のためには」という主観的な意見ばかりで、「地域の人のためには」という客観的な意見が考えられていないということに気がきました。そこで、ソーシャルキャピタルフィールドスタディで飯田の地域を真剣に学び直すことで、地域のためにと考えられる人になりたいと思ったことがきっかけです。

○伊坪さん

私がフィールドスタディに参加した理由は、生まれてからずっと飯田市に住んでいるので、今回のフィールドスタディで、自分の住んでいる飯田市についてもっと詳しく知れたらいいなと思ったからです。

また、自分の進路選択の中に飯田市役所があるので、市役所の行っている活動に参加してみたいと思ったからです。

○富井さん

私は飯田東中学校出身で、りんご並木の世話をしたり、まちづくりについて学んでいた経験を生かしたいと思ったからです。また、大学への進学を希望していて、実際の大学生と一緒に学んでいく中で大学生の学びを経験したかったからです。

○大沢さん

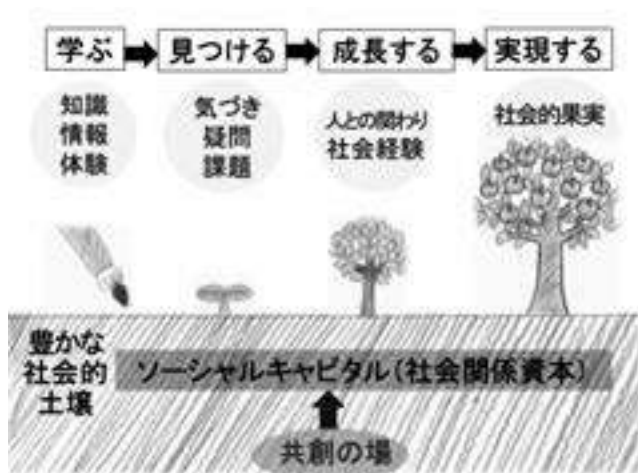
私は飯田市のまちづくりに興味があったことと、大学生との活動を通して学べるものがあると思い参加しました。

○寺澤さん

次に、私たちが取り組んだ活動を紹介します。大学生と活動する前に、事前学習として名城大学の福島先生より

ソーシャルキャピタルについて講義をしていただきました。

また、この講義を生かして飯田市の地域づくりのノウハウを私たちなりに図に表してみました。こちらをご覧ください。



まず、知識・情報・体験といった種を土壌に植え付けます。すると、さまざまな気づき、疑問、課題といった芽が土壌から顔を出します。次第にその芽はたくさんの人との関わり、社会経験を通して成長し、最終的に社会的果実となって実現します。

この過程を支えるにはソーシャルキャピタルである豊かな土壌が必要なのですが、飯田市には古くからそれが根付いています。なぜなら共創の場というみんなで意見を出し合う場があるからです。つまり、飯田市はこの共創の場と呼ばれるソーシャルキャピタルを支えるものがあるので、豊かな地域づくりを生み出すことができるということがわかりました。

また、アンケート調査を通して自分の周りにソーシャルキャピタルの実態を事前に調査するという課題に取り組みました。そして、当日を迎えました。私たちが参加したプログラムはご覧のとおりです。

次に、それぞれの活動を通して得たものを発表します。私は、この3日間で飯田市の魅力の多くは飯田市の公民館活動から生まれたということに衝撃を受けました。なぜなら、このフィールドスタディに参加するまで公民館という建物は知っていましたが、そこで何が行われているか考えたことがなかったからです。

しかし、私が事例調査に行った天竜川鷲流峡プロジェクトも公民館での他愛もない飲み会の中で生まれたことや、現在、世界的にも注目されている人形劇フェスティバルも公民館活動が大きく関わっていることを学ぶことができました。

また、公民館活動の偉大さを知ると同時に、現在、少子高齢化によって公民館活動の存続が危ぶまれていることもわかりました。そして、今後はもっと多くの若者が公民館活動に魅力を持ち、私も若者の1人として積極的に参加していこうという気持ちになりました。

○伊坪さん

私は、今回のフィールドスタディで橋北では一丸となって地域を盛り上げたり、昔ながらの景観を守ろうとしているということがわかりました。また、橋北の2つの活動は福島先生のお話で例えると、社会的土壌にまると博物館や面白倶楽部があり、社会的果実には地域のコミュニティーが広がるなどの効果があるということがわかりました。そして飯田市全体では、公民館と地域の関わりが強いということがわかりました。

今回のフィールドスタディで、飯田市についてより興味を持つことができ、フィールドスタディの後、橋北のイルミネーションフェスタや飯田の市民大学講座に参加してきたので、今後もそのような飯田市で行っているイベントに参加していきたいです。

○富井さん

私がこの3日間で勉強になったのは、学習に主体的に取り組む大学生の姿です。私は授業などで覚えることが多く、つい受け身な学習態度になってしまいます。しかし、大学生がみずからどんどん質問や提案をしていたり、真剣に話し合う姿を見て、ただ暗記をする受け身の自分から、どうしてこうなるのか、そこまで考えられる自分に成長したいです。

○大沢さん

私の中での変化や感じたことは、参加する前まではとにかく都会で暮らしたいと思っていたのですが、今回の学習を通して飯田市について深く知り、地域のつながりや共創の場を大切にしている飯田市で暮らしていきたいと思うようになったことです。

○寺澤さん

最後に活動を終えて今思うこと、そして、私たちからリニア時代に向けた地域活性化についての提案をさせていただきます。

私は、大学生と行ったフィールドスタディと1年間参加してきたリニア駅周辺整備市民ワークショップを通して、地域の若者たちによるリニア駅を拠点とした地域の魅力の発信が大切だと思いました。

リニア駅を造って終わりではありません。多くの人に利用してもらうためには地域の若者に愛着を持ってもらい、常に魅力を発信していくことが重要だと思います。

例えば、リニア駅周辺に果物の木を植え、維持・管理をし、収穫をするということや、飯田・下伊那の木々や花を育てるという作業を私たち若者が行い、それらを情報発信するなどです。

私はこのようなことができれば、私たち若者が地域に関わる第一歩となり、大人になっても地域を支え続けるきっかけになると思います。

次に、飯田の果物を使った提案を1つお願いします。

○富井さん

私からの提案は「LIFE WITH IIDA APPLE」です。これは飯田の特産であるりんごを子供たちが育てて、りんごを使ったお酒のシードルに加工し、二十歳の成人式に自分が作ったりんごのシードルで乾杯をしようというもので、今回のフィールドスタディに参加されていた大学生の方々と一緒に考えました。

この活動を考えた理由は、フィールドスタディで喜久水さんに行ったときに、「若者が地元で愛着を持っていないのが悩み」と言っていたことが印象的で、班のメンバーでどうにかできないかと思ったからです。

スクリーンまたはお手元の資料をご覧ください。活動はこのような流れで行いたいと考えています。最初に、小学6年生のときに卒業記念としてりんごの木を植えます。併せて、二十歳の自分へのメッセージラベルをデザインします。次に中学生です。市内の飯田東中学校のように木を育てながら学校生活を送ります。次に高校生です。高校3年生でりんごを収穫し、シードルへ加工します。最後に成人式で飯田に帰ってきたときに、自分たちで育てて造ったシードルで乾杯をしようという流れです。

この活動によって、飯田でしかできないりんごの栽培ができ、地元の方との関わり、農業の楽しさを知って地元の良さを知ってもらい、飯田に愛着を持ってもらうことが目的です。同時にシードルの普及の貢献につながらないかとも考えています。

この活動を実現させるために、引き続き私ができることを探し、考えていきたいと思っています。

○寺澤さん

これで私たちの活動報告を終わります。フィールドスタディでお世話になった学輪IIDAの先生方、ありがとうございました。

○藤田教授（和歌山大学）

先生からコメントをお願いします。

○福田先生（飯田女子高校）

飯田女子高校の福田と申します。よろしくお願いいたします。

このたびは高校生たちに大学生と一緒に学ぶ機会、大学の先生のお話を伺う機会、そして地元を盛り上げようと一生懸命頑張る大人たちの活動やその取組について教えていただく機会をいただきまして本当にありがとうございました。学校、学年の枠を超えた学びをすることで視野が広がったのではないかと思います。わずか3日間ではありましたが、1つのことを成し遂げた生徒たち、きっと達成感があったのではないかと思います。

同時に高校生の中に自信も生まれて、次に進む力をいただいたと思います。といいますのも今ここにいる高校2年生3名は、それぞれの学校でこのたび生徒会に立候補いたしまして、今後、生徒会役員として学校をリードし、ときには支える存在となっていきます。また、3年生の寺澤さんはこの後、地域経済学を学ぶということで、いったん飯田から出てしまいますが、「将来戻ってきて地域の活性化に取り組みたい」と言っております。このように一步を踏み出した高校生たちにとって、この夏の学びは意義のあるものであったと思います。また、高校生として鍛えなければいけない力、課題が見えたこともありまして、私たち教員にとっても成果がありました。

さて、このような活動を通して生徒たちは、もっと知りたいという気持ちと地域が抱える課題に気づくことができたのではないかと思います。恐らく彼女たちの中には「私

たちが何とかしなければいけない」そんな思いがあると思います。

今後の課題としましては、この気持ちや課題を高校の学びの場にどのように結びつけサイエンスしていくかです。より深い学びにするためには継続的な探究活動が必要になります。しかし、現在の大学入試のための受験対策とこのような活動はなかなか両立が難しいところがあります。特に普通科では、こういった活動を深める時間、そして教員の数も足りません。そういったところが大きな課題です。

また、高校の枠を超えた学校間のネットワークづくりや地域との協力・連携、さらにより専門性を高めるためには大学との連携も今後必要になってきます。例えば、この夏の取り組みで見えてきた課題の解決に取り組む必要があります。地元の高校生が継続してデータを取る、そして、そのデータを大学生が分析するなど、そういった連携もあるといいなと思います。

最後になりますが、すべてはこういった若者たちのために今私たち大人にできることを考えなければいけないときにあると思います。このような活動の機会を今後もいただけるとありがたいです。また、事前学習、事後学習、継続的な探究活動のために、今後も大学の先生方、大学生、飯田市、そして地域の皆さんのご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

○藤田教授（和歌山大学）

大学からのご報告あるいは高校生のお話や参加動機を聞いていて、まさに牧野市長が言っておられる「地域人になりたい」という声や、ふるさとや市役所、あるいは実際の大学生の学びを知りたいということがこの高大連携のプログラムの参加動機であったことが感じられました。また、その結果としてどうだったのかということに不安に思っていていたら「大学生が非常に主体的に勉強している姿勢が感じられた」という高校生からの声も聞かれ、非常に良かったと思います。

客観的に聞かせていただいていると思うのは、こういった大学のプログラムに高校生も参加してもらうことによって、高校生に対して外からの目線でふるさと飯田を見直す機会を提供できたのだらうということです。そういう意味では、もちろん公民館活動を含めたいろんな場で育ってきた若者たちだと思いますが、やはり外の大学生たちが飯田を学ぶ

というプログラムに参加して改めてふるさとのことがわかったということも随分あるのではないのかなと思いました。

また、シードルの発表も、ツーリズムというのはまさに物語性があるということに配慮をしたまとめができていて、見事な発想だなと思います。生徒会に主体的に参加する高校生も生まれたということで、今回の高大連携の実りというのは非常に大きかったと思います。

ここで、飯田OIDE長姫高校と飯田女子高校の校長先生から、高大連携に対する学校としての期待というのがそもそもどこにあって、今回どうだったのかというところについて、今の高校生たちの発表を含めてコメントをいただきたいと思います。

○原校長（飯田OIDE長姫高校）

本校では、飯田市と連携したこの地域人教育を行って7年目になり、数値ではまだ正確に測定されていませんが、我々教員側としては、自主性が育っている、また、コミュニケーション能力も向上しているということを実感しております。

本校には様々な学科がありますが、商業科の各学年2クラスずつ、計6クラスで地域人教育を導入しております。これを教育課程に組み込んでいるというところがほかの高校と全く違うところであると思っています。1年生から商業科のビジネス基礎の授業の中で地域人教育を入れて、それから、2年生の商業実務の中でまた地域人教育を入れて、3年生の課題研究3単位すべてをこの地域人教育として行います。

毎週金曜日の午後、飯田市の公民館主事に来ていただいて、本校の教諭と一緒にグループに入って支援をいただいています。すでに制度化されており、これが持続可能なかたちになるようさらに発展させていきたいと思っています。これによって、生徒の自主性、積極性、何よりもロイヤルティー、地域への愛着心が増していると感じます。

最初に目標に持ったのが地域への就業率をアップさせ、たとえ大学に行っても環流する生徒を増加させるということでした。まだ詳しいデータはありませんが、就業率については、地域への就業率はアップしていると感じております。

また、今商業科でやっている地域人教育を、来年度は工

業科でも導入して、地域の要望に合ったものづくりを3年間継続的にやっていくことを考えています。商業科の地域人教育も、豊かなまちづくりを通してそれを結果的にビジネスにつなげていくようなかたちで発展させたいと思っています。

それから、本校の高校戦隊テックレンジャーについて、来年は授業の中でテックレンジャーの実施、プロモーション、関連グッズ製作などそれぞれ株式会社形式のように分担させプロジェクト型の学習をするような楽しいプロジェクトも用意しております。

学輪IIDAには来年度以降もぜひお世話になりたいと思いますし、学輪IIDAでの生徒の活躍が大学進学にプラスになるようなシステムづくりを大学でも考えていただくと、さらにつながりが太くなると考えております。

では、ここからは国松に変わります。

○国松先生（飯田OIDE長姫高校）

飯田OIDE長姫高校の国松と申します。現場で地域人教育を担当しています。地域人教育は、最初は小さく始めて一部の教員が一部の生徒と始めたものが7年経過し、今、商業科の全員の教員が全員の生徒と3年間かけて授業の中で学んでいます。3年生は11チームに分かれて地域人教育をやっており、どの子にこの場で発表させていただいても遜色ないようなかたちに成長していると考えております。

そういった意味で、8月だけではなく、高校生と大学生と一緒に学ぶということを継続的にできれば、大学の先生もこういった地域で学ぶ子たちを評価しやすいかなと思いますし、またそういった視点で長期的に関係性を持っていただくということでお願いできればと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。それでは飯田女子高校の有馬校長先生からコメントいただきたいと思います。

○有馬校長（飯田女子高校）

有馬でございます。私どもの学校は、クラスでこれから地域人材の育成、また探究活動をやっているところなんです。ただ、まだまだ全体の教員の理解と、新しいカリキュラムを作っていかなければいけないという問題点があります。ですから、今日はここで勉強させていただくつもりで出させていただきます。

もともと私たちの学校がこの下伊那地域に存在する目的

というのは、「地域から愛され、選ばれた学校をつくる」ということがありまして、私たちは私学の学校でありますので、やはりそこでは生徒集めをしなければならないということが絶対にあるわけです。

そのような中で、将来的にわたって本校に子どもをたくさん入れるということではなく、地域で人を増やす、そしてその地域の中で選んでくださる高校になりたいということを考え、その目的達成のためには生徒や保護者や教職員の、本校に対するロイヤルティーのアップを図らなければならないと思います。

そう考え、私が校長になってから、例えば飯田りんごんというお祭りに生徒を参加させるようにしました。毎年夏に、650人の生徒の中から120～150人が自由参加で、夏休み中に練習をして出させていただいております。

また、今年度は本校が長野県で行われた全国総文祭の会場になりました。ほとんどの会場が松本や長野でしたが、本校は人形劇クラブという全国的に珍しいクラブを持っており、それと人形のまち飯田ということもあり、本校を全国総文祭の飯田会場として行うことができました。そのため、AVIAMAの会長に来ていただいたり、いろいろな評価を受けたりすることができました。ここでは高校生が舞台からすべて自分たちで人形浄瑠璃を行ったということで評価をされました。その際、本校の生徒のほかに隣の飯田高校の生徒2名に助けていただきました。

飯田では、中学校まではこの人形劇クラブがありますが、高校からはないわけです。この飯田地区には人形劇、浄瑠璃を行っている団体が4座ありますが、高校生時代には関わりがなくなってしまいます。そんな中で、来年度から始めようと私どもの学校が中心になって各高校に提案していることが、中学校のときに黒田人形や今田人形で活躍していた生徒またはその教を請うた人たちを集めて、私どもの学校だけではなく地域で人形劇・浄瑠璃に取り組もうということです。そしてその子たちが社会に出ていけたらいいなと考えています。

また、本校独自の母校成人式を行ったり、これで2年目になりますが、長野県は全国的にも小中学校の不登校生が多く、中でも下伊那が非常に多いということを受けて通信制科を行ったりしています。私たちは仏教精神のもとで学校を運営しておりまして、不登校で学校に行けなかったり、

途中で学校をやめてしまった子どもたちにまた社会に出る力を与えて短大や大学、専門学校に行かせたり、または就職をさせたりということも行っています。

学校のロイヤルティーをつけるということでスタートをしていたことですが、教育改革という大きな問題が入ってきました、私学校独自ではなく、もしかしたら地域でいろんなことができるのではないかと考え、この地域に広げたいと思っておりました。そんなことで、飯田市の公民館活動や、またはこの学輪IIDAの存在を私たちもしっかり把握し、一緒に勉強させていただきたいと思ったわけです。

飯田OIDE長姫高校のように専門性を持っているクラスは割と動きやすいかと思いますが、私としては普通科の高校で、座学の授業ではなく外に出て行かせるような人材育成・探究活動ができないか、そしてこれが大学の入試にどのように関わることができるのかという点に問題を感じているところでございます。

私たちの学校に来ている生徒たちは大半がミドル層の子どもたちです。このミドル層に対していろんなやり方ですっきりと勉強させることによって、この子たちがうんと伸びていって、そしていずれは、私たちが育った土地、帰ってきて住みたくなる土地というように、この飯田市にロイヤルティーを持っていくのではないかなと思っております。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございました。

2つの高校ともそれぞれ実践を積み重ねながら高大連携にもご期待をいただいている、我々大学も大学改革、入試で多様な学力を問うというようなことを今いろいろと考えないといけない状態が来ているわけです。その辺りで他の先生からご発言いただきたいと思います。ここから先ほど来何度も出てきている地域人教育に対する飯田市の思いを牧野市長から簡単に整理していただきたいと思います。

○牧野市長

先ほどの成果発表会で発表していただいた生徒の皆さんの声で私が一番注目しているのは、「私たちは地域に出て学んでいます」と、「でも始めは「遊んでいる」と言われ親から理解されませんでした。学校の学び方自体が変化していることを大人の人間たちには知ってほしいと思います」という言葉です。私は、これは課題の中核の部分、ストライ

クの部分を突いていると思うのです。

つまり地域人教育というのは、地域を愛し地域に貢献できるような人材を育成していくことが入り口になっていますが、出口はそれこそ文部科学省はじめ国で言っているSociety5.0という超スマート社会における担い手をどう育成していくかという、むしろその1つの大きな課題に光を当てる教育になっているのではないかということです。

いわゆる偏差値教育で培われた能力の相当部分はAIに取って代わられてしまうのではないかということが国のタスクフォースでもかなり真剣に議論されていて、人材育成の在り方が突きつけられた。これはたぶん、AIの研究者から見ても現実味を帯びた話だと思います。

そういった中で、自ら地域へ入り、課題を見つけ、それをどう解決していくかを考える発想力や、公民館でよく「巻き込まれる力」という言い方をしますが、地域の皆さん方と一緒に考えていく力、それから人を説得して「そういうことをやっていきましょうよ」というプレゼンテーション力といった、AIに取って代わられない能力をもっと育てていくという意味では、地域人教育は非常に大きな役割を果たす可能性があるということを今日も非常に感じました。私は先ほどの二十歳に最後シールドを飲もうという話が非常に気に入って、そういう発想が出てくるような人材育成ということを大学も含めて考えていくことが重要だと思っています。

もう1つ大きな課題としてあるのは、こうした地域人を大学側がどう受け入れていけるかということだと思います。今の大学入試のやり方ということから改革をしていかないと、結局、その10年一日のごとくAIに取って代わられるような能力で大学入試を行っていったって本当にそれでいいのですかと。

むしろ大学としてこうした地域人教育を受けた人材をもっと伸ばしていく仕組みを高大連携の中でつくっていくことが問われているのではないかと。私としては、ぜひ文部科学省の皆さん方と一緒にこの地域人教育を全国展開できればと思っていますが、そのためには高校だけの教育改革ではだめで、先ほどお話があったように普通科の高校生がこの地域人教育をやるためには、大学側も変わらないと一貫通貫の地域人教育ができないと思います。ぜひここにつきましては、先生方にもご理解をいただけてよろしくお願

いしたいと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。大学の先生方からも入試改革、あるいは高校だけで閉じるのではなく大学も含めた次世代をどう育てるのかということの議論をそろそろしないといけないかなと思いますが、ここで、文部科学省初等中等局から来賓としてお越しいただいている田村さんから一言お願いします。

○田村氏（文部科学省）

文部科学省の田村でございます。今の地域人教育、高等学校のことについては、我々といたしましてもこれからの時代を担う教育、その能力を育成するためにこれは必要だということをやっているの、地方創生にも資するということに考えているところでございます。そういった意味で、本年の6月に閣議決定された国の基本方針でも「こうしたような教育を推進することが必要だ」ということが言われまして、我々の組織もそれを担う一端として新しくできたというところでございます。

早速それを推進するために、来年度から50校で、OIDE長姫高校でも言われているような3年間の教育課程の中で地域人材育成のカリキュラムを開発していただくための事業を展開しておりまして、既にかなりの反響を得ているところでございます。それは高校だけではなく、地域を担う地元の市町村、大学、地元の企業などでコンソーシアムをつくっていただけて推進していただくことを念頭にやっているところでございます。ここに今日来られている大学の先生方も、地元での連携にぜひ入っていただきたいと思っています。そのうえで今後のことについて、今日は大学の方が多いので高大接続という関係で大きく話題が出ていますと感じました。

文科省のほうでも、学力の3要素である知識・技能、思考力・判断力、そして主体性を持って多様な人と協働した学びを高校教育の段階で行い大学教育にもつなげていくために、その両者をつなぐ大学を目指して活動いただくという高大接続改革を今行っているところでございます。これは、高校卒業時点の調査書に探究などの諸活動を書き加えられるように平成30年4月指導要領で改訂したもので、このような高校側の変化を踏まえて、大学のほうも入学者選抜の改善に努めていただければと思うところでございます。

もう1点、今日お話を伺っていると、大学生と高校生と一緒にやってみることでお互いに刺激を受けるという段階になっているのかなと思いましたが、やはり発展させていくのであれば、高校の段階で3年間カリキュラムに組み込んで能力が伸びてきたところを、さらに大学4年間でどのように伸ばしていくのかということについて、今後お互いが協力して一貫したカリキュラム化をやっていかなきゃいけないのかなと。

簡単にはいかないのかもしれませんが、そこまでやっているとSociety5.0を支える人材につながっていかないのかなということを改めて思いまして、その点、我々も協力して今後やっていきたいと思っております。

1つお話をさせていただきますと、トップレベルの学校を支援するスーパーサイエンスハイスクールとかスーパーグローバルハイスクールでも、例えばスーパーサイエンスではすでにお互いに協力して刺激し合うようなことは十分できてきたので、来年から高大接続枠を新たに作って、カリキュラム、入学者選抜、育成する人材像、評価方法もお互い共同で作って、それをAO入試や推薦入試にも反映させようとしています。

大学では、その成果を踏まえた上で引き続き教育をどう進めていくかというところも一貫通貫でやっていくということも進んできておりますので、我々のところの地域人材教育の関係は今遅れてこれが始まったところをもっと短いスパンで早く進めていかなきゃいけないと、そういった認識で取り組んでいきたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。

いよいよ大学に賽が投げられたような話であります。この学輪IIDAでは、55大学124名の教員に加えそれぞれのゼミ生、学生という、飯田をめぐるすごい数の関係人口が登場しています。この高大連携は、当初はこういった学生たちの飯田での学びのお返しを我々学輪としてさせていただく必要があるというところから始まったのですが、高校生たちの報告を聞いていて実は我々のほうが高校生の学びの姿勢から刺激を受けている。あるいは、大学生たちも非常に危機感を感じる。そういった若者たちが着実に育ち始めているのではないのでしょうか。

そういう意味では、高大接続という話の中で、それぞれ仕組みなりカリキュラムが違う高校と大学がちゃんと棲み分けて、どうバトンのパスを受けるかということも必要ですが、ある意味で高校・大学が寄ってたかって、次世代の若者をいかに未来人に育てていくのかという視点をちゃんと持つことが必要なのかなと思うわけです。

ここら辺りは多様な学力を評価するということで、いろんな入試制度も含めていわゆる偏差値だけでは測れない学生たちを入学させたいという思いで先生方も日々取り組んでいるかと思いますが、大学の側から見て、この飯田の地域人教育をどう評価できるのかというところ辺りですね。あるいは今後、大学側としてはどのような期待をして一緒に関わっていききたいのか、その辺りについて、いろいろお考えがあらうかと思えますけれども、学輪の先生方からご意見をいただきたいと思っています。フロアからいかがでしょうか。



○竹内客員教授（金沢工業大学）

金沢工業大学竹内です。

今の論点2つですね。まず学輪IIDAの成果、私も最初のころから参加させていただいていますが、非常に上がっていると思います。

今回、一番の成果はやはり飯田の高校生のレベルが、私の大学の学生も含めてみても明らかに高いということです。なぜ高いかというと、経験によるコミュニケーション能力で、先生方がかなり特化した専門的なことを具体的にやらせている。これがフィールドスタディの成果だと思います。

それで私は、学輪IIDAはそろそろ次のフェーズに移るべきだと考えています。今起こっていることは1年に1回

及び8月のフィールドスタディといった点です。この点を線にして面にするためには、やはり先ほど文科省の方が言われた高大連携のカリキュラムが必要ですが、これは今の大学の枠だと難しい。ところが学輪IIDAのように学閥とか関係ないところであれば実証実験できますので、この延長をどういうふうにつなぐかということ具体的に持っていくのが次のフェーズになるかなあと。

具体的に言えば、市長が作られる新しいサイエンスパークなんかには高校と大学を連携した特殊カリキュラムを組んで、そこで成果実証をして、そこに民間連携で具体的なものをやっていくというのが大事です。なぜかという、アメリカの心理学者のアブラハム・マズローが言っているのですが、人間の承認欲求って5つあるのです。最初が生理的欲求、食べて寝ること、2番目が安全欲求、身を守ること、3番目が社会的所属欲求、4番目が承認欲求、最後が自己実現。

私たちの今までの社会は社会的所属、肩書きとか、どう大きい会社に入るかが大事でした。私は昭和の人間で来年還暦ですが、私の生徒と「おごってやるから飲みに行こうぜ」というと「いいです」と言われるのです。「先生と飲んでいる時間は僕にとって無駄です」って。だって彼らはもう千円あったら飲めちゃうのですよ。彼らが必要なのは承認してほしい、先生にちゃんと認めてほしい。

さらにこの先、自分たちが将来どう自己実現できるかがポイントです。この自己実現は今日の高校生たちが言ってくれました。「本当かな」と思いながら聞いていたが、飯田に本当に残って働きたくなるような場を私たちがどうつくることができるかです。それを今日知ったという点で、学輪IIDAがかなり次のフェーズに移ったかなという実感、成果を感じました。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。

明日の内部会議では、もう少しそこら辺りを具体的に議論できればと思っています。

ほかに先生方どなたか挙手いただけますか。

○須藤教授（立命館アジア太平洋大学）

立命館アジア太平洋大学の須藤と申します。私のほうから2点お話をさせていただければと思います。先ほど竹内先生も言われたとおり、今の高校生たちのプレゼンを聞いて

いる限り非常に高いレベルだと感じております。これはいわゆる偏差値で測れるような学力のレベルではなくいわゆる構想力、課題設定力といった関係では非常に高いレベルということです。実は偏差値で入ってくる学生たちはそこが欠けている分、これを大学の初年度の段階で成長させていけない限り大学での教育は非常に難しいという状況にある中で、今回のプレゼンでは非常に期待の持てる高校生たちがたくさんいると感じました。

そういう意味では、今回の高大連携や学輪IIDAで行われているようなフィールドスタディというのは、そういった高校生たちの力をつけていくという意味では非常に有効なやり方であろうと考えております。

もう1点は、先ほど牧野市長がおっしゃられておりました地域人教育の範囲は高校生から大学生までなのですが、今高校生たちのプレゼンを聞いていて、地域の人たちがいろいろ教えてくれるということと、さらに地域の人たちがそこから学びたいという姿勢をかなり持っていらっしゃるのではないかと思います。ということは、地域人教育という考え方をするときに、高校生や大学生のみならず、地域の大人たちについてもその枠に入れてもいいのかなというふうに感じております。

というのは、ご案内のとおりSDGsのゴール4、特にターゲット4.3の中では全人教育、すべての人が高等教育に対してアクセスできるという点、それから持続可能な開発に対して教育という観点、ESDについては4.7の中でも語られているとおりで、地域で今まで住んできたけれど、実は地域の魅力を知らなかったからもっと勉強したいという大人の方々もいらっしゃるのではないかと、そういった方々と一緒に学んでいくことによって、より高校生、若い方々が地域に対しての愛着を持つような仕組みが作れるのではないかなという感触を持ちました。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。

飯田の地域人教育というのは、1つのキーワードとして公民館主事に関わるというような中間支援がカギになっていると思いますが、公民館関係の方でどなたかお願いできませんか。

○秦野氏（飯田市公民館）

飯田市公民館副館長の秦野と申します。

私ども公民館は元々地域の皆さんと一緒に活動をつくり上げていくということを大切に行っておりまして、どのような観点で高校生が地域の皆さんと一緒に活動をしたらいいかということ踏まえて接点をつくるのが可能かと思ひます。

そこでは公民館主事が、地域と学校のコーディネーターとして、そして高校生にとってのファシリテーターとしての役目を果たしています。できるだけ近いところで高校生の悩みなんかを公民館主事が受け止めながら、それを先生方につなぐことができる。飯田市民館としてはそんなようなことを目指しながら飯田OIDE長姫高校と一緒に活動をしています。

○藤田教授（和歌山大学）

はい、ありがとうございます。

我々も学輪でソーシャルキャピタルの一番基本のところは公民館活動ということ常をベースにしながら学生たちの学びを進めており、改めて公民館の方からもご発言いただきました。大学の先生方の中でもうお一方か、お二方ぐらいお願いしたいと思ひます。

○堀尾教授（東京農工大学）

東京農工大の堀尾でございます。私はオブザーバーということで2年目でございますけれども、去年も大変びっくりしましたが、今年はさらにすばらしい展開をされてきたと強く思ひました。

私のほうからは2点あります。1つはこの知のネットワークの考え方についてです。これには気づき、学び、両方入るわけですね。そして、高校生が気づき学ぶだけではなくて、地域も当然学ぶ。私は実は富士見町で、高校生がいることによって地域の人々の気づきがすごく変わるという事例をやったことがあります。おそらく飯田市においても、今の高校生の活動をもっと地域の人にも、さらに今直接関係している地域だけでなくほかの地域の人々にも広げることによって、飯田市全体に大きな力が生まれてくるのではというのが1つでございます。

それから、地域人教育の中で、高校生から地元へ回帰したいとの発言もあって大変うれしく思ひましたが、やはり回帰していくためには地元が強くなっていかなくないわけですね。その地元がこれからどういふふうへ発展するのかという点で、回帰する価値があるということ、つま

り、単に近代化の中で破壊されていったソーシャルキャピタルがまだ残っているという認識ではなくて、それが次の時代にどういふ意味を持つのかということに対するより積極的な教育が必要なのではないかと思ひます。

その中には、再生可能エネルギーだとか、AI時代のいろんなものづくりの方向が変わるということなども含めて、普通科の生徒にもそういう新しい世界のイメージを植え付けていかなくないけなひ。やはり未来論がかなり必要になっているのではないかというその2点でございます。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。

ほかにもう一方だけ、大学関係者いかがでしょうか。

○阿部教授（立教大学）

立教大学の阿部と申します。今まで先生方、皆様方おっしゃったことは私すべて同意で、同意見を持っておりますが、1点付け加えたいと思ひます。この地域人教育への大学側の期待といひますか。

ご存じのように日本の少子高齢化、過疎化は世界のトップランナーです。つまり、もし私どもが日本で処方箋をつくれば、これは世界に売れるソフトになります。今、私のいる大学はスーパーグローバルとなっておりますが、文科省のほうで世界に出ろという話をしています。それはそれで1つ大事かもしれません。

でも、私が強調したのはグローバル人材です。つまり日本の地域を知らずして世界で活躍できるかということです。ですから、例えば留学生と日本の学生が一緒になって飯田で学び、これを学んだ人たちは日本でも世界でも活躍できる。そういう意味ではグローバル人材という視点をぜひ大学で持たたいのじゃないか。

また、例えば水俣がアカデミア水俣で複数の大学の共同施設のようなかたちを考へていますが、ぜひこの学輪IIDAが発展していつてそのようなかたちになっていくことがあってもいいのかなと思ひております。

もう1点、社会連携について、それぞれの大学から来られているのは個人の立場かもしれませんが、今回のこの学輪IIDAの集まりを、個々の参加大学による社会連携のかたちとして見える化・ブランド化してはいかがでしょうか。今後の大学の発展を考へていく上で非常に大事な視点です。そういう意味で、今後この飯田、この学輪IIDAが、その社

会連携の見える化の中心になっていくであろうと期待しています。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございました。そろそろこのトークセッションを閉じていきたいと思います。本日の来賓の方々に一言ずつ感想やコメントをいただければと思います。

それでは、都市づくりパブリックデザインセンターの小澤さん、皮切りにお願いします。

○小澤氏（公益財団法人 都市づくりパブリックデザインセンター 顧問）

皆さんのご発言内容、私も大賛成です。やっぱり最後はこれからバージョンアップしていくにあたって未来デザインについて、もう少し考えてもらうというのが重要なかなと思います。最終的には、市長が言われている人材の環流ということで行くと、今の高校生や今の大学にいる人は飯田にいて何をしたいのかということについて見える化していかないといけないということで、その部分をどのようにあぶり出していくかを考えてもらうというトレーニングが必要なのかなと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

端的なコメントありがとうございます。続きまして、日本経済研究所の大西さん、お願いしてよろしいでしょうか。

○大西氏（日本経済研究所）

私もこれまでに何度か学輪には参加させていただいております。毎回、地元高校生の皆さんのプレゼンをお聞きしていますが、今年からは大学生のプレゼンがなくなっていたのを少し残念に思っています。

これからの時代は、「高校生に発表の出番をつくってあげよう」とか言っている余裕もなくなってきて、飯田でも公務員や企業人といった大人だけで地域社会を運営している時代ではなくなってきているのではないかと思います。

ですから、高校生はもちろん、小学生や中学生も含めて、地域にいる一人ひとりの市民として出番（活躍の場）が用意され、そういった場に出て、自分の意見を発表して、それが地域社会に取り入れられて自信になっていくという循環を構築していく必要があるのです。

あと7～8年でリニアが開通するリニア時代を迎えるにあたって、その間どんどん大人になっていく子どもたちがいますので、そういう皆さんの意見や力をぜひ取り込んで

いっていただきたいと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。それでは引き続きまして、NTTデータ経営研究所の唐木さん、お願いしてよろしいでしょうか。

○唐木氏（NTTデータ経営研究所）

私も何度も参加させていただいていますが、毎年レベルアップというか、中身が濃くなっていることに心強く思っています。皆さんおっしゃるように、これから若者をどううまく生かすかということが大事で、2027年には今日の高校生もある意味世の中の中核になっているわけですから、彼らの発想をいち早く取り入れていって、時代の先取りをしていくということが重要なかなと思います。とはいえ彼らも経験不足のところもありますから、地域の人材のサポートも必要で、例えばシニアのボランティアの方の力も重要でしょうし、企業が今大変取り組んでいるSDGsの活動の一環にこういうアクティビティを取り込むような知恵を出すことによって、産官学連携を実現していくということもあるのかなと思います。

それから、私は企業の人間なのでやっぱりビジネス感覚というのがどこかにあってほしいと思っています。こういう学びを通じて、これから発想してこれが何かのビジネスにつながる。今、東南アジアに行くと、若い人たちがどんどんスモールビジネスを体現し、それを実際に大きな会社に行っている事例がたくさんあります。そういうことが実現できる地域であってくれれば大変若者たちにとっておもしろい、楽しい、わくわくしたそういう町になるような気がします。

場合によっては、何か擬似的に会社をつくらせて株主にする。ただ高校生に無理であれば、それを全国の思いのある人たちからクラウドファンディングでふるさと納税形式を活用したような、いろんな仕組みの中で巻き込んだビジネスをやってみる。それを体験することによって、将来これが、牧野市長がいつもおっしゃっている産業振興にうまくつながって、学びと地域の振興と産業がつながっていくとおもしろいかなと思っています。何か私も考えてみてお手伝いしたいなと思っています。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございました。

それでは最後になりますが、南信州・飯田産業センター専務理事の萩本さん、お願いいたします。

○萩本氏（公益財団法人 南信州・飯田産業センター 専務理事）

地元の者ですので、まずは全国からお越しいただいた先生方に感謝を申し上げたいと思います。全体としては、ソーシャルキャピタルという社会学的テーマが主体であったと思いますが、私は経済人であり、産業人ですのでその立場で申し上げるのですが、これからはもう少し地域経済論、あるいは地域産業論という切り口でも論議を深めて欲しいなあと思いました。

人の体を考えますと、体を支える骨格部分と、動きをなめらかにする軟骨部分があります。ソーシャルキャピタルは温かい社会、住みやすい社会をつくる軟骨部分であり、もちろんそれは大切なのですが、もう一つ体を支える骨格部分の論議があっても良いだろうと思います。

それが働くことの意味であり、働く場所の論議だと思います。地域はここをしっかりとつくっていかないと、結局、若者は流出してしまうということだろうと思います。

今日は、飯田OIDE長姫高校の連携プランの話がありました。興味深い事例で大変に感激をしました。この運動を地域の企業とか、産業界と一体的に取り上げ、若い人の間に地域産業論、地域経済学を広げ、掘り下げていって欲しいなと思いました。

若者の人口流出は全国の地方が抱える悩みです。地方創生は専門分野の人たちだけの、プロの論議にとどめず、こうした事例と共に大いに語り合い、論議して欲しいということを申し上げたいと思います。

○藤田教授（和歌山大学）

ありがとうございます。最後に一言まとめをさせていただきます。

冒頭このシンポジウムの切り出しのところで「地域を支え、世界を担う人財」を育てるというお話がありましたが、よく言われる国際人というのは決して英語ができる人ではなく、やはり自分のふるさとや地域に対するアイデンティティー、いわゆるローカルアイデンティティーをきっちり持った人こそが、実は世界に出て国際人として通用することとは間違いない事実だと思います。

そういった意味で、この飯田の取り組んできている地域

人教育、あるいは大学が高大連携として、自分たちの学生も含めてこの次世代教育に関わろうという姿勢は非常に真っ当な、どこにでも通用する大きな柱なのだろうと思います。

ただ、加えてそういった人材が育った後で活躍する舞台を我々がどう用意しているのかという点でいえば、今後はソーシャルビジネスの視点といったところも本格的に議論をしていく必要に迫られているのかなと思います。

先ほど「学輪IIDAが次のステージに」というご提言もありました。まさに学輪IIDAの活動が飯田市内でも見える化していない、というところから我々は議論をしてきたわけですが、この高大連携をテーマに入れたときに、その見える化に向けたストーリーが少しずつ見えてきたのかなと思っています。

そういう点で、若者たちの未来を考えるときにはいわゆるフォーキャストの考え方だけではやっぱりだめで、20年30年後、彼らがこの日本社会の中核人材になっているときに我々はどういう未来を彼らに残していくのかという、バックキャストの視点からこの学輪IIDAの将来というのも目指していく必要があるということを感じました。

今回、地域が若者を育てるところから高大連携がスタートしたのですけれども、この間の議論を聞いていると、ぜひ今度は若者が地域を変えるというところに持っていけるような活動に、これから学輪IIDAの活動をステージアップさせたいなと思ってございます。まだまだ議論は尽きないところではございますけれども、後の懇親会、あるいは明日の全体会議でももう少し今日の議論を深めていただければと思います。

それでは、非常に短い時間ですけれども、議論の進行にご協力いただいたことに感謝申し上げて、本日のシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。

ありがとうございました。



社会構造と住民参加からみる山村の地域諸集団の実態 —飯田市上村地区程野集落を事例にして—

Current Situation of Local Groups in Mountainous Area from the perspective of Community Structure and Residents' Involvement:
A Case Study of Hodono, Kami-mura District, Iida City

東京農工大学大学院農学府 佐藤 周平
東京農工大学大学院農学研究院 教授 土屋 俊幸
東京農工大学大学院農学研究院 講師 竹本 太郎

Shuhei Sato
Master Course, Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology
Toshiyuki Tsuchiya
Professor, Institute of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology
Taro Takemoto
Senior Assistant Professor, Institute of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology

【論文要旨】

さまざまな組織や集団の活動を網羅的に把握することによって地域の社会構造を分析することができる。本稿は、山村である長野県飯田市上村地区程野集落において「地域諸集団」の活動実態と住民の参加状況について調査を実施した。その結果、行政に近い「公的な集団」から同好のサークルのような「私的な集団」まで多様な地域諸集団の存在が確認された。男性については、地域諸集団に活発に関わる年代として、60代から80代と20代から30代の2つのピークがあること、女性については、70代以降の女性の多くが私的な集団に参加していることが明らかになった。また、諸集団の活動範囲については、上村や程野集落であるものが多く、それより広域の範囲（遠山郷や飯田市）は少なかった。その上で、地域諸集団を手がかりとする手法の有効性を確認するとともに、遠山郷という括りで展開される観光政策が、主たる地域諸集団の活動範囲と一致しないことを指摘した。

キーワード：過疎、遠山郷、集落、公的な集団と私的な集団、市町村合併

Key Words：Depopulation, Tohyamago, Hamlet, Public groups and private groups, Municipal merger

1. はじめに

1. 1 研究の背景

農山村社会はどのような社会で、そこに暮らす人々にはどのような「つながり」があるのか。地域社会の構造分析（地域社会の仕組みを捉えること）に取り組むとき、どのような方法論や分析視角が妥当なのだろうか。都市化の影響により農山村での生活が変容してきたことを背景に、農山村社会は、都市社会とは区別される特有の構造を有するものではなく、むしろ、村落と都市の区別を超えた1つの地域社会としてみなされる傾向にある。地域社会の構造分析の方法論について似田貝（2007）は、住民運動調査や福山及び神戸での調査を振り返りつつ、「住民たちのサークルや社会的領域における様々な資本の活動の連合体のような団体が、社会構造のなかでどのような社会的な、政治的な力を持ち、あるいは持っていないのか、ということ問うことなしに構造を分析することはできない」（似田貝、p.131）と述べている。つまり、「集団」や「団体」が地域社会の構造分析における有効な手掛かりになるという

ことである。

以上のことから、過疎高齢化や農業の衰退、山林とのかかわりの希薄化などの大きな変動を経験してきた現代の農山村を対象とすると、イエの結合や、山林や用水の管理といった生産手段の共同などを重視してきた従来の視点だけでは必ずしも把握しきれない人々の「つながり」があるのではないかと考えた。そこで、本稿では、農山村社会で活動する多様な組織や団体、サークルなどを網羅的に含めた「地域諸集団」に着目して、調査対象地である山村社会の住民の「地域諸集団」への参加状況と各集団の活動について分析を試みた。

1. 2 先行研究

似田貝（1990）は、神戸市で活動する社会諸団体について、市から各集団・団体への財政支出（歳出）の流れを指標に、公共政策との関わりを明らかにした。その中で、「行政と地域諸団体とは活動の役割配分が振り分けられており、また相互に補完・相補し合う活動領域を持っている」（似田貝、p.128）こ

とを指摘した上で、神戸市の公共政策領域が諸集団・諸団体と密接なかかわりをもって展開せざるを得なくなった背景を、「財政悪化に伴う神戸市独特の『都市経営』手法が弱体化し、にもかかわらず請求されつづける市民の生活および社会的諸関係の生産＝再生産維持欲求への危機的対応」、すなわち公共政策の後退を市民活動が補完したと分析している。

また、山本ら（2013）は大分県旧中津江村（2005年3月に合併し、現在は日田市）において、平成の大合併の前後（1996年と2007年）で地域集団の参加状況に起きた変化について調査している。それによると、合併前後で「伝統的な地域集団、年齢集団への参加率の減少」（山本ら、p. 104）が確認されたこと、合併後の2007年に中津江における団体の活動が不活発になったと回答する者が約6割に上ったことを踏まえて、「伝統的な地域組織、集団を中心とした活動の衰退傾向の拡大」（前掲、p. 105）と分析する。その上で、「集落と広域化した自治体とを媒介する合併前町村の範域である地域単位の弱体化」とそれに伴う「過疎集落の高齢者の孤立化」の恐れを指摘している（前掲、p. 107）。

1. 3 目的

本稿は、上村地区程野集落を事例として、山村社会の住民の社会的な「つながり」に新たな視点を付け加えるという問題関心に基き、地域のさまざまな活動や組織（「地域諸集団」）への住民の参加状況を明らかにすることを目的とする。同時に、東京農工大学農学部地域生態システム学科が程野集落において、2016年～2018年の3年間にわたって実施した調査（地域社会システム調査実習）の結果を公表するものである。

2. 調査対象と調査方法

2. 1 調査対象—程野集落の概況—

程野集落は、2005年に飯田市に編入合併した旧上村の北部に位置する。明治以降、旧上村を含む遠山郷は、統合と再編を繰り返してきた。上村地区は1875年に木沢村、八重河内村、和田村と合併し遠山村となる。1881年、上村地区は遠山村から離脱するも、1885年に和田村外四ヶ村連合として再び統合され、和田村外四ヶ村組合と改称して、町村制施行を迎える。しかし、1947年に上村地区は、分村運動を起こして、再び分離した。そして、2005年、南信濃村とともに飯田市に合併した。

旧上村は、程野、上町、中郷、下栗の4集落からなる。国勢調査が小地域集計（町丁・字等別の集計）を実施し始めた1995年以降の程野集落の人口及び世帯数の推移は表1のとおりである。人口と世帯数は年々減少しており、旧上村区域は過疎地域に指定されている。また、林野率が9割を超え（林野面積約12,000ha「2015年農林業センサス」）、旧上村区域は山村振興法で定める振興山村に指定されている。

上村地区に関する先行研究として『遠山谷北部の民俗』（柳田國男記念伊那民俗学研究所、2009年）は住民への聞き取り調査

表1 程野集落の人口と世帯数の変遷

	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年
程野	225 (81)	212 (78)	182 (69)	150 (69)	125 (54)
中郷	160 (68)	153 (63)	124 (54)	84 (41)	64 (38)
上町	323 (123)	305 (112)	241 (100)	176 (72)	132 (63)
下栗	173 (74)	168 (73)	121 (56)	97 (44)	92 (43)
合計（上村）	881 (346)	838 (326)	668 (279)	507 (226)	413 (198)

注：（）内は世帯数

出典：総務省統計局 国勢調査（1995年～2015年）

に基づいて、生業や習俗を網羅的にまとめた資料である。例えば、大正から昭和にかけての程野集落については、聞き取りを踏まえて、次のように記述している。王子製紙にとって代わって程野集落に進出した川金製材工場（川金木材が1917年に設立）や木炭工場（城岸木炭有限会社が設立）の製品や産物を搬出する手段として、1923年に程野集落と喬木村小川との間に設置されたのが竜東索道であった。竜東索道は、木材だけでなく、生活物資や遠山森林鉄道の敷設資材などの輸送も担い、1941年まで約20年間にわたって操業した。「程野は荷物と一緒に当時最先端の情報が索道によって伝えられて、遠山の谷でもっとも生活様式や文化の進んだ地域」であり、上町集落とならぶ「遠山谷の玄関口」であったとまとめている（柳田國男記念伊那民俗学研究所、pp. 366－371）。また、上村全体の近現代の生業の移り変わりについては、浦山（2001）がまとめている。上村地区における住民とニホンジカの関わりに着目しながらも、上村の生業が近世以降の「林業・農業・狩猟の組み合わせ」から、明治以降に「共有林を外部資本に売却し、山林労務者として働き現金収入を得る」ように移行し、昭和初期以降は「外部資本の撤退とマユ・コンニャクなどの商品作物の低迷」や水害や山抜けなどを経験し、過疎化が急速に進んだとした。そして、「高度経済成長期は国有林の伐採やオチャの栽培・販売に現金収入を求めるようになり、国有林の伐採がなくなった1975年以降は観光業に活路を見出そうとしている」と分析している（浦山、pp. 290－291）。

2. 2 調査方法

2016年8月、2017年8月、2018年8月の3回で、程野集落の住民18人（以下、「聞き取り対象者」）に対して面接による聞き取り調査を実施した。なお、調査をとおして把握した聞き取り対象者の家族についても、聞き取り対象者と合わせた「調査対象者」として、分析の対象にした。調査では、調査対象者が、現在参加している、または過去に参加していた組織、団体、グ

ループ及び各団体などの活動範囲や活動頻度、活動場所などについて質問した。本稿では、聞き取り対象者とその家族を合わせた調査対象者82人（在住者55人、他出者27人）を対象に分析を行った。程野集落の人口（表1参照）が125人（2015年）であること踏まえると、約半数近くの住民の状況を把握したと言える。

2.3 用語の定義

本稿では、「地域諸集団」を「その集団に参加するための根拠が、専らその地域における地縁に基づく集団」と定義する。さらに、これらの地域諸集団を「公的な集団」と「私的な集団」に分類した。社会構造の理解の仕方としての公私もしくは、公共私分類は多義的だが、本稿では、それぞれの地域諸集団の活動実態を分類の根拠として重視して、公私の分類を行った。それぞれの定義は表2のとおりである。

表2 用語の定義

用語	定義
地域諸集団	その集団に参加するための根拠が、専らその地域における地縁に基づく集団
公的な集団	行政に関わる組織や公共性のある団体など、その地域全体や多様な人々に関係する集団
私的な集団	余暇を利用して趣味やスポーツなどの活動を行う集団

3. 結果と考察

3.1 程野集落で活動する地域諸集団の概要と住民の参加状況

程野集落で活動している地域諸集団は全52集団であった（表3参照）。それぞれの地域諸集団の活動の実態について、本稿の分類に基づきながら、概観したい。まず、公的な集団については、「自治会」や「消防団（飯田市消防団第17分団）」、「婦人部」といった、従来からの地域諸集団や、2005年の旧飯田市への合併を機に導入された、「上村地域協議会」や「まちづくり委員会」などのほか、「上村小水力発電検討協議会」や「上村御膳プロジェクト」、「かみむらっこ応援団（上村小学校学校運営委員会）」といった、個別の事業やプロジェクト、組織に特化した団体があった。また、「祭り保存会」や「御柱祭実行委員会」、「氏子総代」など、霜月祭（毎年12月に開催され、程野集落では、程野・正八幡宮¹で行われる）や7年に一度の御柱祭（最近では2016年に開催された）といった祭祀に関わる団体も、「自治会」や「婦人会」などが主体となっている

ことから、公的な集団とした。公的な集団の中で、「特別委員会」は上村地区独自の委員会である。「特別委員会」は、自治振興センターの一組織であるが、異動が避けられない市職員を補完する目的で、住民をメンバーとして、継続的に上村の諸課題について協議する組織である²。

公的な集団とは異なり、「体操教室」や「生け花サークル（生け花サロン華の和）」、「バッチワーク」など健康維持や趣味を活動の目的とした集団も認められる。例えば、「生け花サークル（生け花サロン華の和）」は、現在は50代から80代の女性8名程度の集団で、講師を招いて月1回、程野区民センターで開催している。23年続く教室で、高齢者が外出するきっかけになっている。一方で、「若い衆で地域を語らまいか」は、公民館の一組織として、上村を見つめ直し、日頃の悩みなどについて、特に若い人たちが自由に話す場として機能している。集団内での情報共有にはSNSを活用しており、調査時点では23人が参加していた。阿智村や大鹿村などとの広域的な交流も担う。地域諸集団の活動実態については以上のとおりである³。行政の施策の浸透に密接に関わる公的な集団だけでなく、活動内容や活動の問題意識が多岐にわたる私的な集団が存在すること、高齢者の集団から若者を中心とした集団までさまざまな地域諸集団が活動していることが確認できた。

表4に、地域諸集団とそれらに参加する調査対象者の対応関係をまとめた。縦軸に地域諸集団、横軸に調査対象者を配置した。次項では、これらの地域諸集団への住民の参加状況を年代や性別、地域諸集団の活動範囲などを手掛かりに分析する。

3.2 年代別の参加状況

調査対象者のうち、何らかの地域諸集団に参加している住民を年代ごとに整理したものが、図1である。なお、本稿では、他出者が何らかの集団に参加しているケースが認められたことから、他出者も含めて集計した。「何らかの集団に1つ以上参加する人」は公的／私的を問わず、何らかの集団に参加する人の数を表し、20代から90代まで、年齢に関わらず、何らかの地域諸集団に参加する住民が存在することがわかった。「何らかの集団に1つ以上参加する人の割合」をみると、大きい値をとっているのは順に70代、50代、80代だが、より高齢の90代やより若い30代、20代にも何らかの集団に参加している住民が存在することが明らかになった。また、何らかの集団に参加している10代の住民は確認できなかった。さらに、60代や40代が前後の世代と比べて、相対的に低い値をとっていることも確認された。それぞれの地域諸集団ごとで、年齢を基準にした何らかの入会／退会の規範が存在する可能性を指摘しうる。

¹ 柳田國男記念伊那民俗学研究所、2009年、pp. 343-344

² C①氏への聞き取り（2016年8月5日）

³ 上村で活動してきた、さまざまな団体やグループについては、『上村史 歴史編』（上村史刊行委員会、2008年）pp. 437-439も参照のこと。

表3 程野集落の住民が参加する地域諸集団

地域諸集団			公私	活動範囲	活動場所	活動頻度	参加人数
程野自治会			公	上村	①	⑤	15 (1)
まちづくり委員会	本会		公	上村	不明	不明	4 (1)
	生活安全委員会		公	上村	不明	不明	3 (2)
	環境衛生委員会		公	上村	不明	不明	1 (0)
	健康福祉委員会		公	上村	不明	不明	0 (0)
	特別委員会		公	上村	不明	不明	4 (0)
	委員会 公民館	文化委員会	公	上村	不明	不明	1 (0)
		体育委員会	公	上村	不明	不明	2 (0)
広報委員会		公	上村	不明	不明	2 (0)	
分館		公	程野	程野区民センター、①	①	2 (0)	
上村地域協議会			公	上村	不明	⑤	3 (1)
婦人部（旧婦人会）			公	程野	不明	不明	9 (1)
日赤奉仕団			公	上村	不明	③	9 (1)
上村消防団			公	上村	不明	②	9 (2)
親友会			公	上村	市内の山林	③	3 (0)
飯田市役所（職員）			公	不明	不明	不明	3 (0)
かみっこ図書館			公	上村	上村小学校の敷地内 かみっこ交流館	③	4 (1)
上村小学校評議会			公	上村	不明	①	1 (0)
上村小水力発電検討協議会			公	上村	上村自治振興センター、市役所	②	3 (0)
農協			公	不明	不明	不明	2 (0)
飯伊森林組合			公	飯伊地域	不明	不明	2 (0)
遠山漁協			公	不明	不明	①	3 (0)
上村小学校PTA			公	上村	上村小学校	②	4 (2)
かみっこ応援団			公	上村	不明	不明	2 (0)
鳥獣保護管理員			公	上村	不明	②	1 (0)
御柱祭実行委員会			公	程野	不明	不明	6 (1)
文化財保存会			公	程野	程野区民センター	④	2 (0)
氏子総代			公	程野	不明	不明	3 (1)
祭り保存会			公	遠山郷	不明	不明	3 (0)
上村御膳プロジェクト			公	上村	不明	不明	1 (0)
民生児童委員			公	上村	不明	不明	1 (0)
農村女性ネット			公	上村	竜丘公民館	①	2 (1)
飯伊陸協			公	飯伊地域	不明	不明	1 (1)
商工会			公	不明	不明	不明	2 (2)
木遣り			公	程野	程野区民センター	不明	3 (1)
高齢者クラブ			私	程野	程野区民センター	④	9 (0)
生け花サークル（生け花サロン華の輪）			私	程野	程野区民センター	②	5 (0)
パッチワーク			私	程野	地区の集会場	②	3 (0)
中学校同窓会			私	不明	不明	不明	4 (0)
若い衆で地域を語らまいか			私	不明	不明	⑤	3 (0)
まちづくり委員会主催 体操教室			私	程野	程野区民センター	不明	2 (0)
高齢者クラブ主催 体操教室			私	程野	不明	②	2 (0)
飯田美術博物館の有志（露頭）			私	飯田市	不明	①	1 (0)
シニア大学			私	飯伊地域	不明	不明	2 (0)
上村診療所の集まり			私	上村	上村診療所	不明	1 (0)
飯田下伊那詩吟クラブ			私	飯田市	②	②	1 (0)
上村卓球部			私	上村	遠山中学校	③	1 (0)
フラパール			私	不明	不明	③	1 (0)
つくし会			私	不明	喫茶かみ	不明	2 (1)
あんじゃね			私	不明	不明	不明	1 (0)
喜楽会			私	不明	不明	不明	0 (0)
書道クラブ			私	不明	不明	不明	1 (1)

- 注1：「活動場所」の丸数字は、①は「活動によって拠点が異なる。（例えば、自治会はイベントによって開催する場所が異なる）」、②は「借りられる場所によって異なる。」ことを表す。
- 注2：「活動頻度」の丸数字は、①は「1年に1回以上だが、1か月に1回未満」、②は「1か月に1回以上だが、1週間に1回未満」、③は「1週間に1回以上」、④は「不定期だが定例の集まりもある」、⑤は「全く不定期」を表す。
- 注3：「参加人数」は、本調査の調査対象者のうち、当該集団に参加していた者の人数であって、当該集団の所属人数とは異なることに注意が必要である。（ ）内の数字は、過去に参加していた人数。

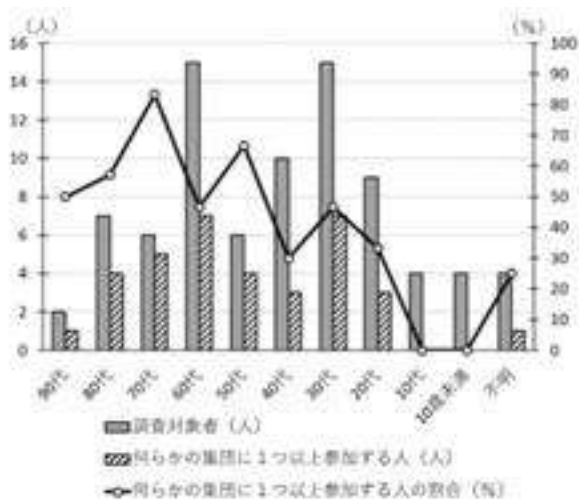


図1 地域諸集団への年代別の参加者数とその割合 (n=82)

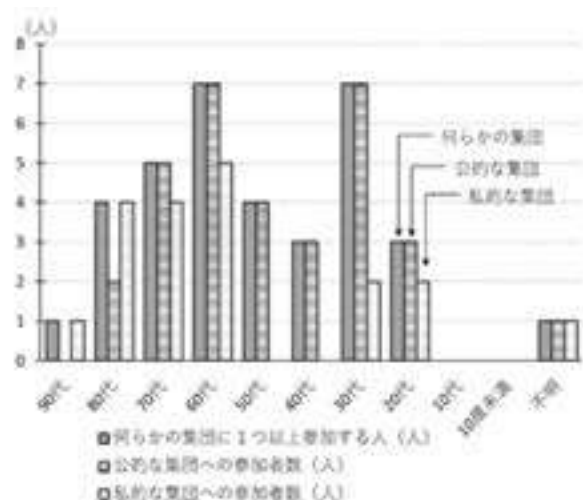


図2 公的／私的別の地域諸集団への参加者数 (n=35)

3. 3 公的／私的の分類に基づく分析

図2は、年代ごとに、公的な集団あるいは私的な集団に参加する人数を示したものである。何らかの集団に1つ以上参加する人のほぼすべて（35人中32人）が公的な集団に参加していることから、図1で確認した集団への参加状況は、公的な集団への参加状況と読み替えることもできる。また、私的な集団については、20代、30代の一部が参加するとともに、60代以上の多くが参加する一方で、40代、50代の参加は確認されなかった。これは、20代、30代の若者を対象とする集団が存在することと、その他の集団が40代、50代を対象としない、もしくは、参加できない状況にあることを示唆している。さらに、年代ごとにみると、地域諸集団への参加率が高かった70代と50代は、全員が公的な集団に参加する点では同じ傾向を示す一方で、私的な集団については、その大半が参加する70代と全く参加しない50代で大きな違いが認められた。80代については、公的な集団に参加する人が半数程度にとどまる一方で、私的な集団には全員が参加していた。

ここまでは、地域諸集団への参加状況を個人に注目して年代別に整理してきた。次は、何らかの集団に参加する個人が1人でいくつの集団に参加しているか（掛け持ちしているか）について考える。図3は、何らかの集団（あるいは公的な集団、私的な集団）に1つ以上参加する人の中で、参加する集団数の平均を年代ごとに求めたものである。実線は、公的／私的を区別しない集団数、点線は公的な集団に参加する人に対する公的な集団数、同じく破線は私的な集団についてである。まず、公的な集団については、20代から50代と80代が、集団の掛け持ちが軒並み2集団程度である一方で、60代、70代については、4つ以上の集団に関わっていることが明らかになった。このことから、60代、70代が公的な集団の間を取り結ぶ役割をもっている可能性が示唆される。一方、私的な集団については、20代、90代の1集団前後から、30代、70代の3集団程度

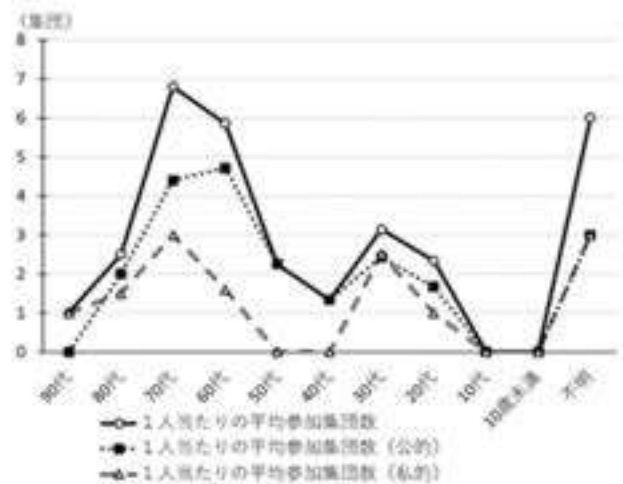


図3 年代ごと平均参加集団数（公的／私的別）(n=35)

を推移している。

3. 4 男女別の分析

本項では、前項までの分析方法を男女に分けて考察する。図4は、何らかの集団に参加する男性を年代別に整理したものである。なお、点線は、何らかの集団に参加する女性を年代ごとに割合で示したもので、図5の値と等しい。同じく、図5は、女性についてで、点線は男性の値である。男性の場合、20代から80代までの半数以上が何らかの集団に参加していることがわかる。女性の場合は、50代、60代、90代で男性を上回る一方で、それ以外の年代では男性を大きく下回り、地域諸集団への参加状況に多少の男女差が認められた。

図6及び図7は、男性と女性それぞれについて、公的な集団と私的な集団への年代別の参加者数を表したものである。男女ともに、40代と50代が公的な集団にしか参加せず、60代、70代で公的な集団と私的な集団の両方に参加する傾向は共通す

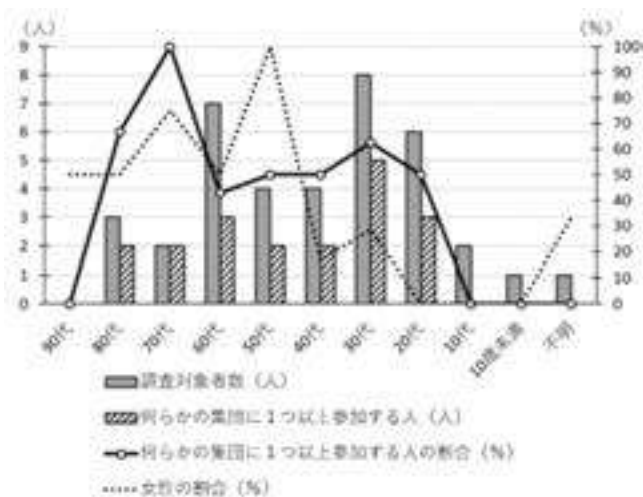


図4 男性の地域諸集団への年代別の参加者数とその割合 (n=38)

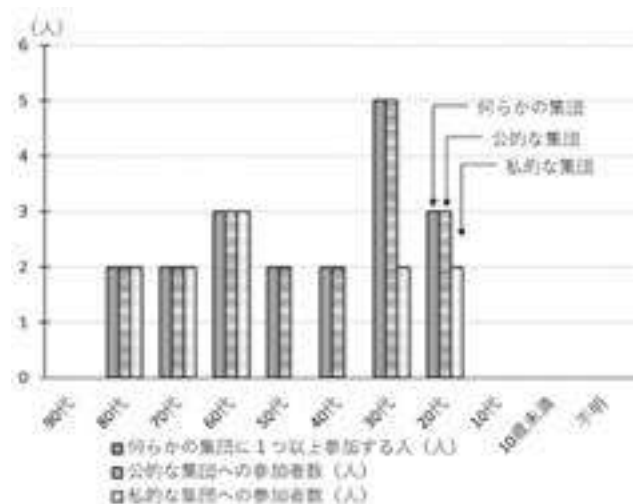


図6 男性の公的／私的別の地域諸集団への参加者数 (n=19)

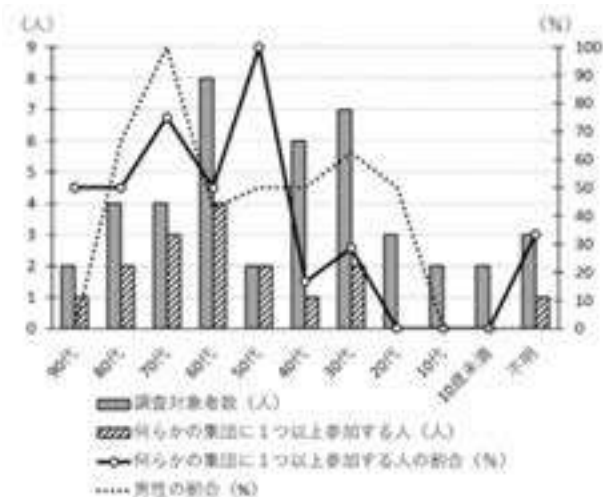


図5 女性の地域諸集団への年代別の参加者数とその割合 (n=43)

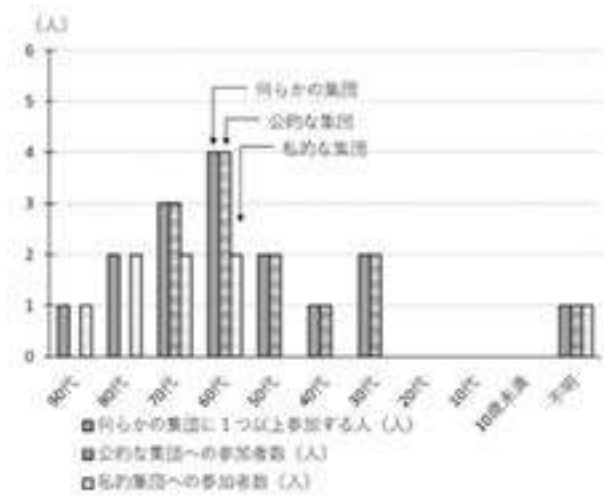


図7 女性の公的／私的別の地域諸集団への参加者数 (n=16)

るが、80代でも公的な集団に参加し続ける男性と、80代以降は私的な集団にのみ参加する女性で違いが見られた。また、20代と30代で私的な集団に参加している男性がいる一方で、20代、30代の女性で私的な集団に参加する人はいないという点でも男女に違いを見出すことができる。

また、掛け持ちしている集団の数（平均参加集団数）についても男女別で分析した。表5、表6及び表7はここまでにしたグラフの数値をまとめて示したもののだが、年代をとおした平均参加集団数についても併記した。

年代をとおして比較すると、公的／私的を問わない平均参加集団数は男性が4集団（表6（6）参照）で、女性が3.6集団（表7（6）参照）と男女に大きな差は見られない。また、公的な集団への平均参加集団数は男性3.1集団（表6（7）参照）に対して、女性2.9集団（表7（7）参照）とほぼ同数である。しかし、私的な集団については、男性が1.5集団（表6（8）参照）なのに

対して、女性は2.5集団（表7（8）参照）と、女性の方がさまざまな私的な集団に参加していることが明らかになった。掛け持ちしている集団の数を年代ごとに比較したものが、図8及び図9である。特に70代では、より多くの集団に横断的に参加する男性と、掛け持ちする集団の数が相対的に少ない女性で、大きな違いがみられた。ただ、70代女性が同年代の男性より3倍近くの私的な集団に参加している（女性4.5集団に対して、男性1.5集団）ことを考慮すると、集団の性格は異なるものの、男女ともさまざまな活動に活発に関わっていることが読み取れる。

3.5 集団の活動範囲

それぞれの地域諸集団をその活動範囲ごとに分類整理したものが、表8及び図10である。程野集落の住民が参加する集団の半数以上が程野集落に限定された集団ではなく、より広域の活動範囲を持つ地域諸集団だと理解できる。特に、2005

表5 地域諸集団への参加状況

総数	90代	80代	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代	10歳未満	不明	合計
(1) 調査対象者数 (人)	2	7	6	15	6	10	15	9	4	4	4	82
(2) 何らかの集団に参加する人数 (人)	1	4	5	7	4	3	7	3	0	0	1	35
(3) 公的な集団に参加する人数 (人)	0	2	5	7	4	3	7	3	0	0	1	32
(4) 私的な集団に参加する人数 (人)	1	4	4	5	0	0	2	2	0	0	1	19
(5) 何らかの集団に1つ以上参加する人の割合 (%)	50	57.1	83.3	46.7	66.7	30	46.7	33.3	—	—	25	42.7
(6) 1人当たりの平均参加集団数 (集団)	1	2.5	6.8	5.9	2.3	1.3	3.1	2.3	—	—	6	3.8
(7) 1人当たりの平均参加集団数 (公的) (集団)	—	2.0	4.4	4.7	2.3	1.3	2.4	1.7	—	—	3	3
(8) 1人当たりの平均参加集団数 (私的) (集団)	1	1.5	3	1.6	—	—	2.5	1	—	—	3	1.9
(9) 何らかの集団に参加している人ののべ集団数 (集団)	1	10	34	41	9	4	22	7	0	0	6	134
(10) 公的な集団に参加する人ののべ集団数 (集団)	0	4	22	33	9	4	17	5	0	0	3	97
(11) 私的な集団に参加する人ののべ集団数 (集団)	1	6	12	8	0	0	5	2	0	0	3	37

注1：計算方法について、(5)は(2)/(1)*100、(6)は(9)/(2)、(7)は(10)/(3)、(8)は(11)/(4)である。

注2：「—」は値がないことを表す。

表6 男性の地域諸集団への参加状況

男性	90代	80代	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代	10歳未満	不明	合計
(1) 調査対象者数 (人)	0	3	2	7	4	4	8	6	2	1	1	38
(2) 何らかの集団に参加する人数 (人)	0	2	2	3	2	2	5	3	0	0	0	19
(3) 公的な集団に参加する人数 (人)	0	2	2	3	2	2	5	3	0	0	0	19
(4) 私的な集団に参加する人数 (人)	0	2	2	3	0	0	2	2	0	0	0	11
(5) 何らかの集団に1つ以上参加する人の割合 (%)	—	67	100	43	50	50	63	50	—	—	—	50
(6) 1人当たりの平均参加集団数 (集団)	—	3.5	9.0	7.0	1.5	1.5	3.4	2.3	—	—	—	4.0
(7) 1人当たりの平均参加集団数 (公的) (集団)	—	2.0	7.5	5.7	1.5	1.5	2.4	1.7	—	—	—	3.1
(8) 1人当たりの平均参加集団数 (私的) (集団)	—	1.5	1.5	1.3	—	—	2.5	1.0	—	—	—	1.5
(9) 何らかの集団に参加している人ののべ集団数 (集団)	0	7	18	21	3	3	17	7	0	0	0	76
(10) 公的な集団に参加する人ののべ集団数 (集団)	0	4	15	17	3	3	12	5	0	0	0	59
(11) 私的な集団に参加する人ののべ集団数 (集団)	0	3	3	4	0	0	5	2	0	0	0	17

注1：計算方法について、(5)は(2)/(1)*100、(6)は(9)/(2)、(7)は(10)/(3)、(8)は(11)/(4)である。

注2：「—」は値がないことを表す。

表7 女性の地域諸集団への参加状況

女性	90代	80代	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代	10歳未満	不明	合計
(1) 調査対象者数 (人)	2	4	4	8	2	6	7	3	2	2	3	43
(2) 何らかの集団に参加する人数 (人)	1	2	3	4	2	1	2	0	0	0	1	16
(3) 公的な集団に参加する人数 (人)	0	0	3	4	2	1	2	0	0	0	1	13
(4) 私的な集団に参加する人数 (人)	1	2	2	2	0	0	0	0	0	0	1	8
(5) 何らかの集団に1つ以上参加する人の割合 (%)	50	50	75	50	100	17	29	—	—	—	33	37
(6) 1人当たりの平均参加集団数 (集団)	1.0	1.5	5.3	5.0	3.0	1.0	2.5	—	—	—	6.0	3.6
(7) 1人当たりの平均参加集団数 (公的) (集団)	—	—	2.3	4.0	3.0	1.0	2.5	—	—	—	3.0	2.9
(8) 1人当たりの平均参加集団数 (私的) (集団)	1.0	1.5	4.5	2.0	—	—	—	—	—	—	3.0	2.5
(9) 何らかの集団に参加している人ののべ集団数 (集団)	1	3	16	20	6	1	5	0	0	0	6	58
(10) 公的な集団に参加する人ののべ集団数 (集団)	0	0	7	16	6	1	5	0	0	0	3	38
(11) 私的な集団に参加する人ののべ集団数 (集団)	1	3	9	4	0	0	0	0	0	0	3	20

注1：計算方法について、(5)は(2)/(1)*100、(6)は(9)/(2)、(7)は(10)/(3)、(8)は(11)/(4)である。

注2：「—」は値がないことを表す。

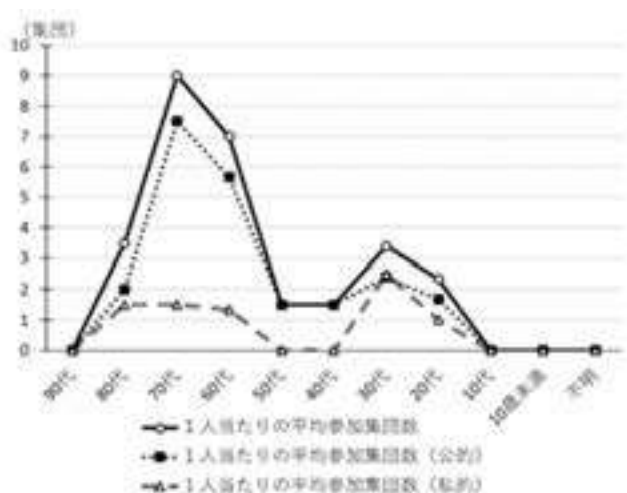


図8 男性の年代ごとの平均参加集団数 (公的／私的別) (n=19)

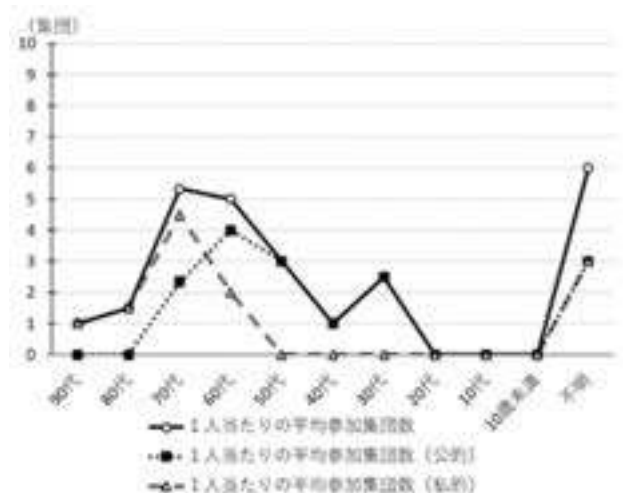


図9 女性の年代ごとの平均参加集団数 (公的／私的別) (n=16)

年の合併前の自治体の単位である上村を活動範囲とする集団が半数近くを占めていることが重要であろう。一方で、合併後の飯田市を活動範囲とする集団は僅かであった。このことは、合併後も、地域でのさまざまな活動の中心は合併前の上村であること、旧飯田市との合併から10年以上が経過した現在も、合併で成立した飯田市のスケールが地域諸集団の活動の場として定着していないことを示唆している。同時に、活動のスケールとして上村が存在感を持つ一方で、程野集落に限られた集団がその半数程度にとどまることも明らかになった。このことから、上村の存在感は、合併前の自治体として立ち上がってくるだけでなく、程野集落だけで活動を維持することが難しくなっているとも読み取れるだろう。

表8 活動範囲別の分析

活動範囲	集団総数		公的な集団		私的な集団	
	(集団)	(%)	(集団)	(%)	(集団)	(%)
飯伊地域	3	5.8	2	5.7	1	5.9
飯田市	2	3.8	0	0.0	2	11.8
遠山郷	1	1.9	1	2.9	0	0.0
上村	24	46.2	22	62.9	2	11.8
程野	11	21.2	6	17.1	5	29.4
不明	11	21.2	4	11.4	7	41.2
合計	52	100	35	100	17	100

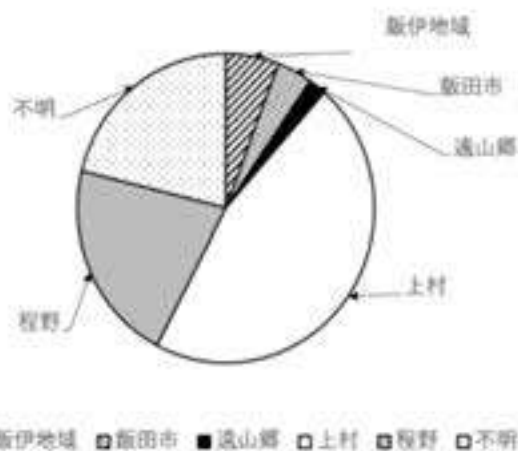


図10 活動範囲別の集団数 (総数)

次に、公的／私的の分類に従って、整理する。公的な集団に限定すると、上村を活動範囲とする集団が3分の2程度を占め、先に述べた上村の存在感はより強まると言える。公的な集団には、飯田市が市内の各地区に設ける「まちづくり委員会」とそれを構成する小委員会や「地域協議会」も「上村」スケールの集団として算入しているため、公的な集団における上村の存在感の大きさは、こうした飯田市の自治体内分権的な施策も影響していると考えられる。公的な集団に対して、私的な集団の場合は、程野集落が上村を大きく上回っていることがわかる。公的な集団と比べ、私的な集団が相対的に近隣の住民の交流の場となっていることが推察される。

程野集落を取り巻く地域のスケールとして、遠山郷という単位がある。図11のとおり、遠山郷は2005年の旧飯田市への合併で、同時に合併した上村と南信濃村を合わせた地域で、現在、観光政策などで重要なまとまりになっている。かつては同じ行政単位⁴に所属していたなど、一定の関わりがあるが、本調査の結果を見る限り、遠山郷を活動範囲とする地域諸集団は「祭り保存会」のみであった。上記のような遠山村の歴史だけでなく、霜月祭をもつ地域としても、また、一部事務組合

⁴ 1875年～1881年の遠山村及び1885年～1889年の和田村外四ヶ村連合、1889年～1947年の和田村外四ヶ村組合の通算約68年間にわたり、断続的に遠山郷が行政単位として機能していた。

行政単位	飯田市						
	遠山郷 (1875年～1881年の遠山村及び1885年～1889年の和田村外 四ヶ村連合、1889年～1947年の和田村外四ヶ村組合)						
	上村 (1947年～2005年)				南信濃村 (1960年～2005年)		
	程野	上町	下里	中部	本沢村	遠山村	
	森林の 所有形態						
	遠山共有林：遠山山林組合（一部事務組合、1948年～2005年）						
	飯田市有林：飯田市						

図11 程野集落を取り巻く階層性

の遠山山林組合⁵（1948年設置、2005年解散）を構成していたという点でも一体性を有すると思われた遠山郷というスケールは、地域諸集団の活動の場としては機能していないことが明らかになった。

4. おわりに

本稿では、程野集落を事例に、自治会や消防団から同好のサークルなど多岐にわたる地域諸集団への住民の参加状況及び各地域諸集団の活動状況について明らかにした。その中で、男性について、地域諸集団に特に活発に関わる年代として、60代から80代がピークの1つになると同時に、20代から30代も第二のピークを形成していることが注目される。20代、30代の男性のうちの複数が、消防団や前述の「若い衆で地域を語らまいか」に参加していることなどを考え合わせると、彼らを地域の活動の重要な担い手として理解すべきだと考えられる。また、女性については、70代以降の高齢の女性の多くが私的な集団に参加していた。このような私的な集団の活動内容が「体操教室」や「パッチワーク」「生け花」などであったことを踏まえると、彼女たちの健康維持や文化的な生活の充実に地域諸集団の活動が重要な役割を果たしていることが考えられる。また、地域諸集団の活動範囲に関しては、公的な集団は上村が、私的な集団は程野集落が中心となっており、合併後の飯田市や遠山郷といったスケールで活動する集団は極めて少ないことが明らかになった。

以上のように、程野集落における人々の「つながり」について、いくつかの理解を付け加えることができた。山村社会の構造分析の方法論として「地域諸集団」に着目する手法に有効性があったと言える。

ただ、本稿では、地域諸集団間の連携やすみ分け、似田貝の研究で取り組まれたような、地域諸集団と行政（本稿の場合、飯田市政）との具体的なかかわり、あるいは、地域諸集団が山

村社会の構成要素の1つとして、地域の維持にどのように貢献しているのか、などについては論及できなかった。これらの点は今後の課題としたい。

最後に、程野集落、上村、遠山郷という地域の今後について考察したい。すでに述べたとおり、遠山郷という範囲は、地域諸集団の活動の場としては非常に弱かった。しかし、飯田市への合併に伴って、それまで独立していた上村と南信濃村という2つの地域が、遠山郷として一体的に捉えられるようになっていく。実際、飯田市では2012年3月に『遠山郷観光戦略計画』を策定するなど、上村、南信濃のそれぞれの観光資源を接続させることに重点を置いている。つまり、地域諸集団の活動範囲と飯田市の観光政策に乖離が生じている可能性がある。遠山郷という広域を活性化させるためには、集客に直結するかは別にしても、上村と南信濃の人的なつながりや受け皿となる多様な地域諸集団の活動の連携が求められる。逆説的ではあるが、上村と南信濃、あるいは本稿が対象とした程野集落のような、より狭域の地域性が発揮されるような施策を検討すべきであろう。

本稿はあくまでも2016年から2018年時点での程野集落の一端を示すものである。程野集落、上村、遠山郷という地域が今後どのように展開するのかについては、地域で活動する若者や移住者の動向、新たな活動や取り組みなどを踏まえながら注意深く追う必要がある。

謝辞

調査にご協力いただいた程野集落の住民の皆さまに厚く御礼申し上げます。また、本稿のもととなった地域社会システム調査実習にあたっては、住民の皆さまはもとより、野牧和将公民館主事（調査当時）をはじめとする飯田市職員の皆さまに大変お世話になりました。あらためて御礼申し上げます。

参考文献

- 柳田國男記念伊那民俗学研究所編『遠山谷北部の民俗』秀文社、2009年
- 上村史編纂委員会『上村史 歴史編』第一法友、2008年
- 上村史編纂委員会『上村史 特集編 上』第一法友、2009年
- 似田貝香門「市民生活と地域諸集団」蓮見音彦、似田貝香門、矢澤澄子編『都市政策と地域形成 神戸市を対象に』東京大学出版会、1990年、pp. 111-153
- 似田貝香門「『構造分析』の調査を振り返って―〈主体を介しての構造分析〉をめざして―」『社会情報』第16巻2号、2007年、pp. 105-158
- 山本努、高野和良「過疎の新しい段階と地域生活構造の変容―

⁵ 『上村史 特集編 上』（上村史編纂委員会、2009年）によると、遠山山林組合は、1948年に上村が組合村から離脱したことに伴い、遠山共有山を所有する一部事務組合として設立された。当初の構成村は、和田村外三ヶ村組合と上村であったと推定される。その後、1950年の本沢村の分村、1955年の和田村外二ヶ村組合の遠山村への改称、1960年の遠山村と本沢村の合併を経たため、遠山山林組合が事務局を設置した際には、組合の構成村は南信濃村と上村であった。2005年の飯田市との合併に伴い、同年9月30日をもって遠山山林組合は解散し、遠山共有山は飯田市有林に統合された。

市町村合併前後の大分県中津江村調査から－」佐藤康行編
『年報村落社会研究 検証・平成の大合併と農山村』農山漁
村文化協会、2013年、pp. 81－114
浦山佳恵「下伊那郡上村におけるニホンジカと住民との関わ
り」『長野県自然保護研究所紀要』第4巻1号、2001年、pp.
281－292



りんご並木をめぐる「モノガタリ」の形成と教育的価値に関する研究

A study on the educational Value of “Monogatari” about the row of apples

東京農工大学大学院農学府 能塚 康介
東京農工大学農学研究院 教授 朝岡 幸彦

Kosuke Nozuka
Master Program, Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology
Yukihiko Asaoka
Professor, Institute of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology

【論文要旨】

災害教育や公害教育、環境教育において、過去の事実をどのように後世に伝えていくかが課題となっている。当時の被災状況や人々の想いを鮮明に伝えることは難しく、当事者が語ることと、その経験を聞いた人が後世に伝えることでは話の鮮明さ、リアリティーに差異が生じる。

飯田のりんご並木は、様々な苦難を乗り越える中で、沢山のストーリーが展開されてきた。特筆すべき点は、りんご並木が後世へと継承される過程で、物語に類似した形式で継承されているところである。本研究ではこれを「モノガタリ」と定義し、りんご並木「モノガタリ」を4つの時期に分類、各時期に関して、市民の並木に対する意識変容やモノガタリ化する上で鍵となるエピソードを文献・ヒアリング調査した。

「モノガタリ」は、過去の事実の忠実な再現は不可能であるが、聴き手に受け入れやすいよう話を“美化”していくことで現代まで継承することが可能である。

キーワード：ESD、物語、まちづくり、地域との連携、継承

Key Words：ESD, Story, Town Development, Regional Cooperation, Inheritance

1. はじめに

災害教育や公害教育、環境教育において、過去の事実をどのように後世に伝えていくかが課題となっている。

岡部（2017）は、「出来事を実証する声や身体に私たちが直に出会う機会が永遠に失われたとき、『写し』（たとえば、写真、映像、証言の記録など）や『痕跡』（たとえば、遺跡、遺品、記録データなど）しか手がかりがなくなってしまったとき…私たちは後世にどのように記憶を継承するのだろうか。」と述べており、過去の経験を語る人がいなくなってしまった際に、どのように後世に過去の出来事を伝えていくべきかということを提起している。

清水（2017）は、公害教育について「『公害』という言葉はいつしか『環境問題』という言葉に置き換えられ、公害被害を経験した人や、それを目の当たりにした人は少なくなっている。」と述べており、当時の出来事を知る人やその語り手が年々減少していることが課題となっている。また、清水は「公害という経験を直接自らの身体に刻んだ人と、そうでない人とは、その言葉から想起される内容は異なるだろう。世代や地域によってもその傾向は異なるかもしれない。」と述べており、当時の経験を語り伝える人と、実際には経験していない方が語り伝えていくことでは、話の鮮明さやリアリティーに差異が生じてしまうことも問題視している。

これらのことから、過去の経験を後世へと継承していき、現代でもその経験について考えていくことが困難であるという問題が生じている。そのため、公害教育や災害教育、平和教育では、四大公害病や東日本大震災、戦争体験など、過去に起こってしまった公害や災害を後世に伝えていく活動が多く行われており、それらを事例に様々な研究が行われてきた。

清水（2017）は、公害資料館ネットワークの活動を「災害や事件などの教訓を『負の遺産』として継承しようという動きの一端である」と述べている。また、「公害経験を継承することの難しさ」について、「公害経験と今をつなぐビジョンの欠如」があると指摘した。高田ら（2012）は、1964年に展開された沼津・三島の石油コンビナート誘致反対運動に焦点を当てている。高田らは、公害地域再生センターが実施している「公害地域の今を伝えるスタディーツアー」について取り上げており、「どのようにすれば公害地域の今を次世代に伝えることが可能なのか」という課題を提示している。宇井（2002）は、「自然災害教育は学校教育において生徒の発達段階に応じた形で、年間を通して組み込まなければならない」と述べ、稲むらの火（読み物）、視聴覚教材、避難訓練を例に学校教育において持続的にこれらの災害について考えていくために、どのような教育がなされているかについて述べている。

これらの事例からも、災害や公害、戦争などの経験を忘れず

に後世へと伝え、現代でも考えていく方法を考える必要がある。その中でもとりわけ注目される事例が、昭和38年から39年にかけて、静岡県三島市、沼津市、清水町に建設予定であった石油コンビナートに反対する住民の「沼津・三島石油コンビナート反対運動」である。この事例の特筆すべき点は、地元の高校生らが、教師や地元住民と協力して、コンビナート建設による公害発生の可能性を調査し、三島市に設けられた調査団とともにコンビナート反対運動が科学的に正しいことを証明したことにある。そして、この公害を未然に防いだ事例はその後の多くの研究や運動家に大きな影響を与えている。また、津波防災物語として知られる「稲むらの火」は、津波の到来を知った浜口梧陵が、自身の田にある稲むらに火を放ち、その火を火事と思わせて、民衆を高台に避難させたことで津波の到来を知らせ、被害を未然に防いだという物語である。これらの事例は、公害や災害を未然に防いだ事例としてよく知られており、教育実践の中でも、小説や、学校教材に取り上げられることで、後世に伝えられてきた。

このような「公害や災害を未然に防いだ事例」を、優れた教育実践であると仮定すると、こうした実践を後世に記録や記憶として伝えていくだけでなく、現在でも引き継がれる持続可能な実践として、どのように継承・発展させていくかが重要となる。

本研究では、大火（災害）からの「復興のシンボル」として植えられ、今ではマチのシンボルとなっている、長野県飯田市の「りんご並木の物語」の継承過程を調査し、現在まで持続可能な実践として後世に伝えていく継承・発展の方法の典型例として再評価したい。

2. 「物語」形式の継承

多くの継承方法の中でも、「物語」形式での継承は、現在まで持続可能な実践にしていくという点において、非常に有効だと考えられる。矢野（2017）は、過去の実事が忘却されずに次世代にも継承され、その実事が後世でも思考されることが重要であり、その事実を意味のあるものへと変化させるには物語として語られることが不可欠だとしている。

しかし、物語として継承していくことには課題もある。岡部（2017）は、物語として語り継いでいく中で、「見えないもの、聞こえないもの、触れえないもの、言語化されないもの、言語化されえないもの…それらに思いを馳せる力や、思いを馳せるなかで人間の生（と死）のあり様や人間の生活世界のあり様を考える態度は、いかにして育まれるのだろうか。これからの教育および教育学の重要な課題である。」と述べており、物語の言葉の有限性や、表現形式の限界を提示し、今後、それらについてどう育んでいくかといった教育学上の課題を提起している。

このことから、過去の実践や事実そのものに留まらず、岡部が指摘する既存の物語形式では継承することが困難であるこ

とも、どのように現在まで継承・発展させることができるのかを考察することが求められている。

まず、過去の実践や事実を過去形で語るだけでなく、現在まで持続した実践として引き継がれるものにする必要がある。しかし、ただ現在の実践を過去の物語に追加していくだけでは継承していく上で不十分である。

物語には、現在の事実を追加する過程で、後世へと継承されやすいよう話を取捨選択したり、話の順序を入れ替えたりして、読み物として美しくする、「美化する」過程がある。それを応用することで、現代にも受け継がれていく実践、物語を作ることが可能なのではないかと考えられる。実際に、話を美化することで、現在にまで受け継がれてきた物語は多く存在する。例えば、昔話として語り継がれてきた「桃太郎」にも美化する過程が見られる。立石（2010）は、立教女学院短期大学幼児教育科の学生が記憶している桃太郎の話の分析を行っている。立石は、桃太郎と動物の関係が、「主従の関係から仲間の関係へと変わ」っていること、鬼退治以降の話が簡素化したことが明らかになったとしている。また、平成期に出版された桃太郎の出版物の収集分析を行っている。その結果、動物たちが「家来、お供」といった主従関係になっているものが70話、「仲間になる、一緒に行く」といった協働関係になっているものが26話であり、この他の描写を見ても学生たちの記憶とは反対に、平成期の出版物では動物たちとの関係を主従関係で書いているものが多いことを指摘した。これについて立石は、「物事をなす時の相手を、主従関係ではなく協働関係で捉えようとする意識が働いているとみることもできよう。非常に現代的な変化と言える」と述べている。杉浦（1994）でも現代絵本の桃太郎は、鬼が反省し、人間と仲直りをしたことで、今度は村人の生活を助ける結末となっており、今日の変容を見せている絵本があることを指摘している。これらの論文から、桃太郎においても、現代により受け入れられやすいように暗い話は避け、美しい話になるよう変容を遂げていることが分かる。しかしこれはあくまでも話自体がフィクションであるからできるとも考えられる。

では、災害や公害、環境問題など、実際に起こったことについても、物語として美化していくことは可能なのだろうか。災害経験の継承という面で、岡部（2017）は、出来事の実験者が、自分の経験した苦痛に耳を傾け、分かち合ってほしいと思った際、「語る人が聴く人からの共感や理解を得られやすくなるよう、聴く人にとって受け入れられやすい言葉や筋書きをつい選んでしまう」ということや、他者が自分の経験を聴くことで傷ついたり、苦悩したりしないよう、「出来事の記憶を再生や克服といった希望のある物語」を語るかもしれないと述べている。また、継承という面でも、宇井（2002）は、稲むらの火の物語について、感動的な話は国を越え、時代を越えて語り継がれるものであるとしており、美しい物語が後世へと伝えられるのだと述べている。これらのことから、記憶を書き換えるのではなく、受け入れられやすいような言葉を選ぶ

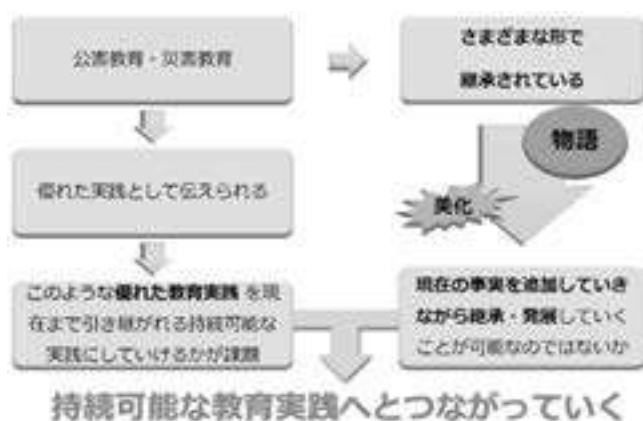


図1 研究フローチャート
出典：筆者作成

ことや、災害からの復興や克服、また、災害・公害の防止などといった面を軸にした話にすることで、美しい物語にすることが可能になると考えられる。

優れた教育実践を、どのように現在まで持続可能な実践にしていくかという課題を解決するためには、物語の美化と、現在の事実の追加と組み換えを絶えず繰り返し行っていくながら現代に受け入れられやすい形で継承していくことで、持続可能な教育実践へとつながっていくのではないかと考えられる。そして、「物語のような過去の事実だけでなく、常に美しい話となるよう話を美化していきながら、現在の事実を取り入れ、継承していく方法」を本研究では「モノガタリ」と定義する。

山名ら（2017）が指摘する「物語」と異なる点は、「物語」は本来、過去の事実のみを語ったものであり、始まりと終わりがあるが、「モノガタリ」は、過去の事実だけでなく、現在進行形の事実も継承しており、「始まりはあるが、終わりが無い」という点である。今回は、飯田市のりんご並木に関する様々なモノガタリの比較分析や、聞き取り調査の結果から、現在のりんご並木の物語は、どのように「モノガタリ化」されているのかを調査し、考察した。

3. 「モノガタリ化」するプロセス

モノガタリとして語り継いでいく上で、「美化」のプロセスは現代まで継承していく上で欠かせないものである。ここでは、「りんご並木のモノガタリ」の中で、美化されていると考えられる部分について述べる。

植樹当時からりんご並木の手入れを行っている飯田市立飯田東中学校の「りんご並木に関するパンフレット」類（以下、東中パンフとする。）、飯田市役所の『飯田市のシンボル りんご並木』（以下、シンボルとする）、飯田市美術館の『特別陳列 りんご並木60年—これまで・これから—』（以下、60年とする。）の全3つのパンフレット、及び2018年8月から2019年8月にかけて行った聞き取り調査の結果、そして参考資料



図2 『歩め地域と共に 育てよ市民と共に 広げよ並木の心を』
飯田市立飯田東中学校パンフレット



図3 『飯田市のシンボル りんご並木』



図4 『りんご並木60年—これまで・これから—』



図5 『夢と希望 りんご並木の記録
(平成30年度 天皇皇后両陛下下行幸啓記念号)』

として飯田東中学校が発行している『夢と希望 りんご並木の記録(平成30年度 天皇皇后両陛下下行幸啓記念号)』(以下、『夢と希望』とする。)を中心に考察した。

美化が行われている部分を調べるため、大火の時期から現代までを、萌芽期(飯田の大火～りんご並木植樹開始)、生成期(植樹後～約400個の収穫)、展開期(収穫後～りんご並木公園化)、飛躍期(公園化後～現在)と4つの時期に区分した。

3. 1 萌芽期(1947年・飯田の大火～1953年・りんご並木植樹開始)

この時期は、飯田の大火の時期から、りんご並木を植樹するまでの期間である。

各モノガタリの内容は以下の通りである。

昭和二十二年四月二十日、飯田市の大半が焼失する大火が起きました。その五年後の昭和二十七年、飯田市は徐々に復興し、大火を教訓として市内には広い防火帯としての道路(現在の並木通りと通り町)がつくられました。そんなとき、当時の飯田東中学校長松島八郎先生が、朝の全校講話で、北海道の街路樹の美しさやヨーロッパにあるというりんご並木、またそのまちの人が落ちた実を備え付けのかごに入れ、盗るものがないという話をされました。飯田東中学校の生徒達は、自分たちの手でりんごの木を防火帯の道路に植えたらどうかと考えました。その思いは次第に強くなり、全校に広がりを見せて、学友会(生徒会)総会の議場で満場一致で決議されました。生徒からの上申を受け、松島校長先生は市役所へりんご並木の提案に訪れます。そこで市の助役から次のような話を聞きました。予算がないこと、維持管理の問題、町なかのりんごを盗む犯罪者を増やしてしまうのではという懸念…。帰校後、その話を校長先生から聞いた役員生徒が学友会で報告したところ、こう発言した生徒がいました。

「今回の植樹計画のうちで、だいじなことの一つは、共同の



図6 大火後の飯田
出典：飯田市立飯田東中学校にて筆者撮影



図7 りんご並木植樹
出典：『夢と希望 りんご並木の記録 平成30年度 天皇皇后両陛下下行幸啓記念号』より引用

精神だ。さらにそれを推し進め、りんごの実を盗む人がこのまちには一人もいないようにする。そういう理想を持ってこの仕事にあたるべきではないか。僕らは赤い美しい実をみらせることで、町並みだけでなく、まちの人々の心を美しくしていきたいのだ。それこそが飯田の復興の達成ではないか。」

割れんばかりの拍手の中、りんご植樹計画は再決議され、再び市へ提案され、認められたのです。

そして昭和二十八年の秋、実際にりんごの木が植樹されました。

出典：飯田東中学校『りんご並木パンフレット』より引用

昭和二十二年の飯田市の大火は、市街地の三分の二に相当する約七三ヘクタールを焼失する甚大な被害をもたらした。焦土と化した街の復興に向けて、市は十文字に配置された二本の防火道路建設に着手する。そのうち一本の三〇メートル幅の防火帯が、現在のりんご並木の原型である。

当時飯田東中学校の校長であった松島八郎氏は、ある日の朝会で生徒たちに、札幌で目にした街の光景を語った。街路樹が繁る広い道路と美しい街並みにふれ、話はヨーロッパにあるというりんご並木にも及んだ。

赤いりんごの実が輝く並木道。そこを歩き交う人々。校長の言葉を受け留め、生徒たちはその光景を心に描いた。それ

はやがて「自分たちの手で美しい街をつくろう」という、大きな夢にまでふくらんだ。

…生徒たちの想いを聴き感銘した松島校長は、さっそく職員に相談した。反対する者はいなかった。しかし学校だけでできることではない。学友会長たちとともに市長・助役のところに外向き、旨を伝えた。

「りんごの木を植えた並木道をつくりたい。木の世話は学友会で責任をもって行います。」

当初、懸念する声も挙がった。「街の真ん中にりんごの木を植えれば、盗まれるに決まっている」と笑う者もいた。しかし「赤く実ったりりんごを見れば、誰も手を付けない。そういう街をつくりたい」との生徒たちの熱意に、市も全面的に協力することとなった。

昭和二十八年、東中学校全校生徒千五百名の手で、四十本（四十七本植えたが七本枯れた）の苗木が植えられた。美しい街をつくる夢の第一歩を踏み出したのである。

このときの感動を、松島校長は次のように記している。「…町の人たちはこの美しい風景に見とれて歩く。美しいものは子供たちだけではない。町の方々も、また、そこを通る村の人々も美しくなるのだ。…私たちは長い間の夢を地におろした。これの完成に力を尽くそう。…更にこれをりっぱに生長させてこそ、美しい誇りであり永遠の思い出となるのである。」

…松島校長の願いに応えるように、昭和二十九年、東中学校にりんご並木の管理を行う緑化部が誕生する。

出典：飯田市『飯田市のシンボル りんご並木』より引用

昭和22年（一九四七）4月20日午前11時48分、東常磐町から発生した火災は、瞬く間に燃え広がり、飯田市街地のおよそ8割を焼き尽くしました。この飯田大火によって、当時の飯田市民のおよそ半数が罹災し、城下町の面影を残していた飯田の街は、焼け野原となりました。

大火から1か月あまりの5月28日に発表された「飯田市復興都市計画」は、「防火都市」「不燃都市」をめざす大規模なものでした。それまで5%に満たなかった空き地率を30%に広げ、市街地を十文字に区切る広い防火帯道路と谷川とで六つに区画し、惣掘沿いに広がっていた寺院の墓地を整理しました。また、橋南では裏界線を設け、出火元付近の扇町は民家を取り除いて広場としました。これがのちに飯田動物園などになりました。

こうした復興により、かつて幅3mにすぎなかった下横町は、幅30mの防火帯道路となりました。りんご並木はその街路樹として誕生したのです。

…昭和27年（一九五二）、飯田東中学校の松島八郎校長（当時）は、北海道の美しい街路樹のこと、そして誰も実を持ち去らないりんご並木の話を、全校生徒に語りました。

感動した生徒たちは、りんご並木の実現を市役所に提言します。ところが、すでに街路樹の植栽を決めていた飯田市は、

その提言に耳を傾けようとはしませんでした。しかし、生徒たちもあきらめません。校長をはじめ教職員の助けを得て、ついに飯田市を説得します。

「並木で町を美しくするばかりでなく、町の人々の心まで美しくしたい」という子どもたちの理想が、大人たちを突き動かしたのです。

昭和28年11月8日、37本のりんごの木を植樹しました。大火の瓦礫を掘り起こしての大変な作業でした。2年後の昭和30年5月に花が咲き、6月には47個の実が付きました。

出典：飯田市美術博物館『特別陳列 りんご並木60年—これまで・これから—』のパンフレットより引用

これらの3つのモノガタリを見ると、どのモノガタリでも、大火から、りんご並木植樹までが細かく記載されていることが分かる。飯田の大火という人々に悲劇をもたらした災害からどう立ち直ってきたかという内容がこのりんご並木のメインとなる話題だということがうかがえる。しかし、この3つの話の中にも異なる点が存在する。それは市役所への提案の場面である。

東中パンフでは、「松島校長先生は市役所へりんご並木の提案に訪れます。…その話を校長先生から聞いた役員生徒が学友会で報告したところ…」というように、校長先生が提案をしたというように書かれているのに対し、シンボルでは、「学友会長たちとともに市長・助役のところに外向き、旨を伝えた」、また、60年では、「感動した生徒たちは、りんご並木の実現を市役所に提言…」とあり、生徒たちが提案に出向いたように書かれている。このことから、市民に多く配布されるパンフレットでは、生徒たちが校長先生の朝会での講話を聞いたことで、市にりんご並木植樹を提案しにいったという美しいモノガタリが形成されており、話が美化されていることがうかがえる。

また、飯田在住で、飯田東中学校の卒業生で元緑化部員だったAさんへの聞き取り調査から、この時期に関して以下の証言が得られた。

ここ（現在のりんご並木のある道）は露天商がすごかったです。それこそテント張りののがここにずーっと並んでいたんですよ。それらを撤去しないと、見た目悪いじゃないかということで、これを撤去することが最初。それが取れて、周りにきちんと道路との境ができた、そうした時に初めてこうしようって話がもちあがりましたね。

りんご並木を植樹する前に、その地で商いをしていた露天商を撤去したという歴史があった。しかし、この話は3つのモノガタリにも『夢と希望』にも撤去といった記述はない。このことから、否定的な要素と捉えられる恐れのあるものはモノガタリに含めないのではないかと考えられる。

3. 2 生成期（1954年・植樹後～1956年・約400個収穫）

この時期は、りんご並木の植樹後から、約400個ものりんごを収穫するところまでの内容である。

各モノガタリの内容は以下の通りである。

世間からの批判や実の盗難…など、悲しみもありました。

出典：飯田東中学校『りんご並木パンフレット』より引用

しかし、りんご並木の歴史には幾多の試練も刻み込まれてきた。当初植えた四十本の苗木は、翌年十九本が枯れてしまうという憂き目に遭う。初めて実を結んだりんごも、心ない人々によって盗られてしまう苦い経験もした。

出典：飯田市『飯田市のシンボル りんご並木』より引用

昭和30年（一九五五）、はじめて実ったりんごは心ない人に取りられてしまい、収穫できたのは4個のみでした。このことが10月13日の朝日新聞で報じられると、全国から生徒たちを激励する手紙が寄せられました。

広島県尾道市の有安勇（ビンゴ・なみ）さんから毎月1回手紙が届くようになったのも、このころからです。以来、有安さんがなくなる平成7年（一九九五）まで続き、その交流は『りんごになった茂くん』（小林桂三郎著）として出版されました。

有安さん以外にも、由井協さんや新保正秋さんなど、多くの方々と手紙のやりとりなどの温かい交流が続きました。

…東中生徒たちは、あたたかい激励の言葉を胸に、多くの方々の助力を受けて、りんご並木を今日まで育ててきたのです。…

…昭和29年（一九五四）に全校生徒で組織する学友会の中に「緑化部」が誕生します。各組から2名が部員として選出され、りんご並木の管理の中心的な役割を担ってきました。…

出典：飯田市美術館『特別陳列 りんご並木60年—これまで・これから—』のパンフレットより引用

これらの3つのモノガタリを見ると、飯田の大火からりんご並木植樹の部分に比べ、あまり細かくは書かれていないことが分かる。60年が、一番細かく書かれているが、ここでも、りんごの木が枯れてしまったことや盗難ではなく、それにより、新聞の報道、全国から激励の手紙が多く寄せられたこと、そしてその中でも、ビンゴ・なみさんとの交流について多く記載されている。これについてはAさんへの聞き取りでも、

Q地域の人々の考え方が変わったのはなぜか。

—南信州さんの新聞があるんですが、その新聞で生徒さんたちがこういう風な努力をして、実のなるのを楽しみにしていますといった文面を書いてくれました。それで収穫の時は収穫でドーンと載ってくれる。そんなようなことがあって余計みんな関心をもっていただいたと思いますね。



図8 収穫

出典：『夢と希望 りんご並木の記録 平成30年度 天皇皇后両陛下 行幸啓記念号』より引用

Qビンゴ・なみさんなどからの便りが来る前と来た後の違いはありましたか。

—これは違いますよ！それは気分的な問題としてプレッシャーが、即やらなきゃという気持ちはあったと思いますね。

とある。地域の人への理解の深まりや、ビンゴ・なみさんを中心とした多くの方々からの手紙が、生徒たちのやる気を引き出していたことが分かる。

このことから、盗難や世間からの批判、枯れ木などの否定的な要素は減らし、全国からの激励や多くの方との交流があったからこそ現代まで受け継がれてきたといった肯定的な要素を多く含んでおり、肯定的な要素に重点を置いた美化がここでもなされていると考えられる。

3. 3 展開期（1956年・収穫後～1999年・りんご並木公園化）

この時期は、りんご並木の収穫後から、りんご並木の公園化事業の施工までの期間である。

各モノガタリの内容は以下の通りである。

…駐車場計画やごみ問題など、悲しみもありました。…

出典：飯田東中学校『りんご並木パンフレット』より引用

…昭和四十年代にはモータリゼーションの波を受けて、りんご並木を駐車場にする計画が浮上した。五十年代には並木の老朽問題に直面し、生徒たちは自分たちが手懸けた並木の伐採も行っている。

…昭和五十九年、りんご並木の活動が評価されて、「吉川英二文化賞」と「内閣総理大臣賞」というふたつの大きな賞を受賞した。前者は優れた教育成果への功績、後者は緑化の推進



図9 整備前のりんご並木
出典：飯田市商業・市街地活性化課より提供



図10 整備後のりんご並木
出典：飯田まちなか情報 (<http://blog.iida-machinaka.com/?eid=1320840>) より引用

に尽くした功績に対しての受賞であった。

りんご並木の活動はモデルとなって全国へ伝播している。昭和四十九年、松島校長がその美しい街並みを生徒たちに語った札幌に、りんご並木が生まれた。静岡県浜松市のフルーツパークには飯田のりんご並木が再現されている。これらは地域間交流へと発展し、人と人を結ぶ契機にもなっている。

平成三年、飯田東中学校をはじめとする関係団体が集まり、「りんご並木まちづくりフォーラム」を結成した。六回に及ぶワークショップを経て策定されたプランをもとに、十一年には並木全体が公園のように改良整備されている。…

出典：飯田市『飯田市のシンボル りんご並木』より引用

…昭和39年（一九六四）には、「りんご並木後援会」が設立され、物心両面の支援がはじまりました。

…りんご並木の歴史は、決して順調だったわけではありません。りんごの実の盗難が続くなか、昭和52年（一九七七）10

月には、りんごがかじり捨てられる事件がありました。そのたびに生徒たちは「町の人々の心まで美しくしたい」と決意を新たにしたいといます。盗難こそ今では無くなりました。それでもいまだに並木にゴミが捨てられることなどがあります。

昭和56年・57年には、アメリカンシロヒトリの大発生などで苦しめられました。

昭和43年・58年頃には、市街地の駐車場不足を解消するために、りんご並木を駐車場にしたら、という声が挙がり、生徒たちが存続を訴えたこともありました。

しかし、昭和60年にはりんご並木は「日本の道百選」に選ばれ、平成11年には、生徒たちの意見も取り込んだ「りんご並木公園化事業」が実現しました。今では、歩行者天国など、さまざまなイベント会場としても利用されるようになっています。

出典：飯田市美術博物館『特別陳列 りんご並木60年—これまで・これから—』のパフレットより引用

これらの3つのモノガタリを見ると、どのモノガタリにも駐車場化計画についての記述があることが分かる。しかし、3つ全てで、駐車場化計画にふれているわけではない。シンボルでは、りんご並木活動への表彰や、その活動が地域間交流につながっていること、そして最後にはりんご並木の公園化事業にふれている。60年では、りんご並木活動に関する苦難について多く書かれているが、それで終わらず、その苦難を乗り越えて、「日本の道百選」に選ばれたことや、りんご並木の公園化事業が施工したことが記載されている。この展開期の中だけでも、苦難からの再生といった1つの美しいモノガタリが形成されていることが分かる。

3. 4 飛躍期（1999年・公園化後～現在）

この時期は、りんご並木の公園化後から現在までの期間である。

各モノガタリの内容は以下の通りである。

しかしそれ以上の多くの方々のお支えをいただきながら、「心の美しい人の住むまちをつくりたい」というりんご並木の“初心”は後輩たちに脈々と受け継がれ、りんごは毎年見事な実をつけてくれているのです。

出典：飯田東中学校『りんご並木パンフレット』より引用

木々は時とともに変わっても、並木に寄せる思いは変わることなく、先輩から後輩へと受け継がれてきた。街も、住む人の心も美しくありたいとする、りんご並木に託された願いは、人々の共感を呼び、全国から激励の声が寄せられた。これが試練を乗り越える原動力になってきた。

平成二〇年には、二〇以上の市民団体が連携し「りんご並木まちづくりネットワーク」を設立。創意工夫あふれる歩行者天国イベントを開催し、交流空間としても活用されはじめた。

誕生から半世紀以上経たりんご並木は、飯田市民の心を映



図11 現在のりんご並木
出典：2019年9月13日、筆者撮影

す象徴として、豊かに美しく成長発展してきた。街を貫く一本の道は、美しい街を希求する人々の、心に通う道でもあるだろう。

出典：飯田市『飯田市のシンボル りんご並木』より引用

…東中生徒たちは、あたたかい激励の言葉を胸に、多くの方々の助力を受けて、りんご並木を今日まで育ててきたのです。

…平成2年（一九九〇）に緑化部は「並木委員会」と改称して現在に至ります。その活動は、並木の維持・管理のための計画と運営の中心的な役割を果たすことで、生徒たちのまとめ役となっています。毎日の並木の世話は、当番となった生徒たちが行い、交替で並木の作業と観察を続けてきました。入学当初は並木の作業に不慣れで、いやいや作業に参加したり、参加しない生徒もいるといいます。テスト勉強をしたいときに当番が回ることもあったでしょう。しかし、先輩や後援者に作業を教えてもらい、慣れた手つきで作業を行えるようになっていきます。こうして東中全校生徒によって脈々と受け継がれてきた活動が、りんご並木を支えてきたのです。

…60年にわたって歴史を積み重ねてきたりんご並木。現在も大きな役割を果たしています。平成23年（二〇一一）3月11日、東日本大震災が発生し、東北地方に甚大な被害をもたらしました。この報道に接した飯田東中学校の生徒たちは、その年の秋、被災地に実ったりんごの実とともに、アルミ缶の回収活動による売り上げ金を被災地に贈りました。かつて飯田大火に見舞われ、多くの人々の善意によって助けられた飯田の、同校だからできる支援と考えたからでした。

飯田東中学校では、それ以前からりんごの実を災害の被災地に贈っていましたが、この大震災は格別に、生徒たち自身にりんご並木の存在の大きさを知らしめたといいます。

「飯田大火からの復興のシンボル」からはじまったりんご並木は、「全国の復興を支援するシンボル」へと変わってきました。

た。このことは、生徒たちにとって、また飯田市にとっても、今後のあり方を指し示す大きな指針となることでしょう。

出典：飯田市美術博物館『特別陳列 りんご並木60年—これまで・これから—』のパンフレットより引用

これらの3つのモノガタリを見ると、どのモノガタリでも、多くの方々からの援助という点についての記述がみられた。東中パンフでは、「…多くの方々からの励ましやお支えをいただきながら…」とあり、シンボルでは、「…りんご並木に託された願いは、人々の共感を呼び、全国から激励の声が寄せられた。」とある。60年では、「東中生徒たちは、あたたかい激励の言葉を胸に、多くの方々の助力を受けて、りんご並木を今日まで育ててきたのです」とある。これらのことから、りんご並木の物語には、多くの方々からの援助や激励があったからこそ現在まで継承されているという内容が含まれていることが分かる。また、シンボルと、60年では、最後が飯田全体に関する話で締めくくられている。

萌芽期から飛躍期と全4期について整理したが、全体を通して、飯田の大火からの復興として、そしてりんご並木の初心である「心の美しい人の住むまちをつくりたい」といった想いから中学生が始めたりんご並木が、現在でも初心を受け継ぎ、今では飯田が誇るりんご並木に変容していることがどのモノガタリからも読み取れる。

4. おわりに

りんご並木の実践は、過去の災害の経験から生まれた優れた教育実践として受け継がれ、飯田市民のシンボルとして継承・発展されてきた。そして、現在まで続くモノガタリの中で、美化されている点が何点もあった。

第1に、りんご並木のモノガタリからは、飯田の大火からの復興のため、りんご並木を植樹したことや、盗難や世間からの批判、枯れ木という苦難から、全国の方々からの激励によって再生したことなど、否定的な話から、肯定的な話になるという構成が繰り返し見受けられた。

第2に、モノガタリとして構成していく上で、いくつか採用されなかった話もあった。これらの話は、撤去ややる気のなさなど、否定的な要素があったため、モノガタリには含めなかったのではないかと考えられる。

第3に、現在でも、「心の美しい人の住むまちをつくりたい」というりんご並木の初心が継承されていた。このことから、「モノガタリ」として継承していくことによって、言語化されえないものをも継承していけるのではないかと考えられる。

このように、過去の出来事を美化していきながら継承していく物語、「モノガタリ」として継承していくことが現代にまで続く持続可能な教育実践を行っていく上で重要となるのではないかと考えられる。そして、「モノガタリ」として継承していくことで、言語化されえないものをも継承していくことが重要になるのではないだろうか。

参考・引用文献

- 朝岡幸彦（2009）公害教育と地域づくり・まちづくり学習，環境教育Vol. 19-1, 81-90
- 安藤聡彦（2015）公害教育を問うことの意味，環境教育Vol. 25-1, 4-13
- 林大造（2007）阪神・淡路大震災を踏まえた防災教育プログラムの現状と課題，神戸大学都市安全研究センター研究報告，第11号，265-270
- 林美帆（2015）公害を学ぶ今日的意義－公害資料館連携から見た公害教育－，日本環境教育学会，Vol. 25-1, 70-81
- 笠井哲（2012）『稲むらの火』における「防災」の思想について，研究紀要，第53号
- 加藤詔士（2011）「稲むらの火」の教材化をめぐる考察，愛知大学教職課程研究年報，創刊号
- 窪田愛実，羽鳥剛史（2015）地域の物語との協和性認知と住民協働事業への参画に関する研究，土木計画学研究・論文集第32巻，359-366
- 越山健治，室崎益輝，高田祐孝（2001）「戦後の大火に見る復興都市計画に関する研究」，日本建築学会計画系論文集，第550号，217-223
- 牧野光朗編著（2016）『円卓の地域主義』事業構想大学院大学出版部
- 宮崎隆志（2001）地域づくりと公民館 飯田市竜丘公民館を事例に，北海道大学大学院教育学研究科紀要，84，127-149
- 永瀬節治（2016）広川町における「稲むらの火」の遺産と歴史まちづくりへの展望，和歌山大学防災研究教育センター紀要，第2号，17-22
- 長野県飯田市立飯田東中学校（2018）『夢と希望－りんご並木の記録－（平成30年度 天皇皇后両陛下下行幸啓記念号）』（株秀文社
- 長野県飯田市立飯田東中学校（2017）『飯田東中学校七十年史』（株秀文社
- 野田恵（2013）ライフストーリー・ライフヒストリーと自然保護教育・自然体験学習，日環境教育，Vol. 23-1, 28-34
- 岡部美香（2017）『災害と厄災の記憶を伝える 教育学には何ができるのか』（山名淳，矢野智司編著），勁草書房，3第5章151-173
- 小栗有子（2013）伝承と自然保護教育・自然体験学習－人と自然とのかかわりの多義性－，環境教育Vol. 23-1, 35-42
- 小澤紀美子（2007）環境教育資料の重層的な継承，環境教育Vol. 17-2, 19-25
- 清水万由子（2017）公害経験の継承における課題と可能性，大原社会問題研究所雑誌，No709, 32-43
- 杉浦篤子（1994）「桃太郎の系譜－絵本に見る昔話の今日の変容－」，藤女子大学・藤女子短期大学紀要，第33号第2部，21-34
- 高田研，渡辺豊博，西岡昭夫，宮本憲一，藤岡貞彦，岩松真紀，降旗

- 信一（2012）公害学習から地域再生へ～沼津・三島コンビナート建設反対運動をふりかえり今日の地域再生運動との接点を探る学習会の報告～，環境教育，Vol21-3, 48-55
- 立石展大（2010）昔話の変遷－「桃太郎」を例として－，立教女学院短期大学紀要，第42号，1-16
- 宇井啓高（2002）環境教育と自然災害教育，富山大学教育学部研究論集，No. 5, 83-90
- 矢野智司（2017）『災害と厄災の記憶を伝える 教育学には何ができるのか』（山名淳，矢野智司編著），勁草書房，終章304-319

引用パンフレット

- 「歩め地域と共に 育てよ市民と共に 広げよ並木の心を」，飯田市立飯田東中学校，（2018年8月に提供を受けた）
- 「飯田市のシンボル りんご並木」，飯田市，（2018年8月に提供を受けた）
- 「りんご並木60年－これまで・これから－」，飯田市美術博物館，（2018年8月に提供を受けた）



大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

【学輪IIDAの趣旨】

大学連携会議「学輪IIDA」は、飯田に価値や関心を有する大学研究者のネットワーク組織です。

飯田と大学との1対1の関係から、飯田を起点に様々な大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するため、平成23年1月に設立されました。

学輪IIDAのコンセプトは、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」です。大学研究者同士が相互に知り合い親睦を深めながら、モデル的な研究や取組を地域とともに行っていこうとする試みです。大学研究者の有機的なネットワークの形成を通じて、大学の専門的な知見や人材を地域に呼び込み、これまで飯田が培ってきた経験や取組と融合することで、地域の課題解決や付加価値を高めていくような新しい形の大学的な機能の構築を追求していく挑戦でもあります。

学輪IIDAは、役職や規約などの無い緩やかな（平らな）ネットワーク組織です。共通のキーワードは「飯田」であり、大学研究者による「ボトムアップ」で「ボランティア」な活動を基本としています。設立当初19大学43名だった大学研究者の参画も、これまでの様々な活動を通じて、令和半年12月末日現在までは60大学・機関、131名もの大学研究者が参画するまでに至り、ネットワークの輪が広がっています。

学輪IIDAの知のネットワークを通じて、「地域（内部）の知」と「大学（外部）の知」が融合する「共創の場」を創出し、持続可能性を追求する地域として、様々なモデル的な取組を多様な主体の連携と協働のもと進めていきます。

【学輪IIDAのこれまでの主な取組】

1 大学連携会議「学輪IIDA」の設立

（平成23年1月29日～30日）

飯田と関係の深い大学研究者が一堂に会し、今後の方策等について検討するため「大学連携会議」を開催した。会議の名称を「学輪IIDA」とし、様々な提案、課題等の中から、現実的なもの、実施可能なものを抽出し、具体的な行動を起こしていくため「プロジェクト会議」を設置していくことを確認した。

2 大学連携会議「学輪IIDA」全体会

学輪IIDA全体会は、年に一度学輪IIDAメンバーが飯田に会し、大学連携や学輪IIDAの取組に関する情報の共有、学輪IIDAの今後のあり方や具体的な取組に関する検討及び学輪IIDAの取組を市民など多くの方に関

てもらうことなどを目的に開催するもの。

例年、1月下旬の土日2日間で開催しており、土曜日は誰でも参加可能な「公開セッション」を、日曜日は学輪IIDAメンバーによる「内部討議」を開催している。

○平成23年度学輪IIDA全体会

（平成24年1月28日～29日）

学輪IIDA全体会「公開セッション」を初めて開催した。初回開催のため、参加研究者による自身の専門領域や飯田との関わり、関心事項などに関するプレゼンテーションを行った。

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議やウェブサイトの構築など、今後の取組に関する検討を行った。2日間で、17大学31名のメンバーが参加した。

○平成24年度学輪IIDA全体会

（平成25年1月26～27日）

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び地域と大学との連携による地域づくりの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①豊橋技術科学大学シャレットワークショップ

豊橋技術科学大学：大貝 彰 教授

②デジタルプラネタリウム共同プロジェクト

和歌山大学：尾久土 正巳 教授

③参加型地域社会開発（PLSD）研修

日本福祉大学：大濱 裕 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学：平岡 和久 教授

②飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学：小畑 力人 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地域と大学との連携による地域づくりの

可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

東京農工大学大学院農学研究院

朝岡 幸彦 教授

飯田女子短期大学 高松 和子 教授

南信州・飯田フィールドスタディ講師

桑原 利彦 氏

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議の今後の取組や、旧飯田工業高校後利用に関する将来展望や具

体的な整備などについて意見交換した。2日間で、18大学33名のメンバーが参加した。

○平成25年度学輪IIDA全体会

(平成26年1月25～26日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「学びの場 飯田」の魅力や可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①地域社会システム調査実習

東京農工大学：朝岡 幸彦 教授

②法政大学西澤ゼミフィールドワークの取組

法政大学：西澤 栄一郎 教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学：平岡 和久 教授

②飯田における伝統工芸の活性化に向けた調査報告

京都外国語大学：高島 知佐子 講師

③飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学：小畑 力人 教授

④知のネットワークを活用した人材育成に向けた取組

法政大学：高柳 俊男 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「学びの場 飯田」の魅力や可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

法政大学人間環境学部：石神 隆 教授

豊橋技術科学大学建築・都市システム学系：

大貝 彰 教授

東京大学大学院教育研究科：牧野 篤 教授

「内部討議」では、各研究者の感じる飯田の価値・魅力・可能性に関する意見交換、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組及び学輪IIDA紀要作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、17大学32名のメンバーが参加した。

○平成26年度学輪IIDA全体会

(平成27年1月24～25日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び右肩下がりの時代における持続可能な地域の実現をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①法政大学国内スタディージャパン研修

法政大学：高柳 俊男 教授

②グローバルシティ・飯田における多文化共生

上智大学：蘭 信三 教授

宮崎産業経営大学：福本 拓 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

和歌山大学：藤田 武弘 教授

立命館大学：平岡 和久 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地方消滅時代における飯田下伊那

－右肩下がりの時代における持続可能な

地域の実現のために－

コーディネーター：

しんきん南信州地域研究所 林 郁夫 所長

パネリスト：

首都大学東京教養学部：大杉 覚 教授

立命館大学政策科学部：森 裕之 教授

京都大学大学院経済学研究科：諸富 徹 教授

「内部討議」では、旧飯田工業高校後利用に関する検討、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組、及び学輪IIDA機関誌作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、21大学38名のメンバーが参加した。

○平成27年度学輪IIDA全体会

(平成28年1月23～24日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学：酒井 理 准教授、ゼミ生

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

東洋大学：小林 正夫 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性

コーディネーター：

法政大学人間環境学部：石神 隆 教授

パネリスト：

立命館大学政策科学部：平岡 和久 教授

東京大学大学院工学系研究科：瀬田 史彦准教授

一般財団法人日本経済研究所：

大西 達也 調査局長

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校活用構想案に関する説明、学輪IIDAの活動を支える知の拠点のあり方、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、20大学32名のメンバーが参加した。

○平成28年度学輪IIDA全体会

(平成29年1月21～22日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、信州大学航空機システム共同研究講座の開講についての報告及び「様々な「知」や「人財」が共鳴して集う地域の実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学：酒井 理 准教授、ゼミ生

飯田OIDE長姫高校商業科

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学：平岡 和久 教授

[信州大学航空機システム共同研究講座報告]

信州大学航空機システム共同研究講座の開講について

信州大学：柳原 正明 特任教授

[パネルディスカッション]

テーマ：様々な「知」や「人財」が共鳴して集う
地域の実現に向けて

コーディネーター：

法政大学人間環境学部：石神 隆 教授

パネリスト：

名城大学副学長 都市情報学部：

福島 茂 教授

和歌山大学観光学部長 観光学部：

藤田 武弘 教授

京都外国語大学外国語学部：

堀口 朋亨 准教授

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、24大学42名のメンバーが参加した。

○平成29年度学輪IIDA全体会

(平成30年1月20～21日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、高等学校による活動紹介及び「イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」をテーマにしたフリーディスカッションを開催した。

[基調報告Ⅰ 学輪IIDA実践事例]

①飯田市を基盤とした地域社会と教育の結びつき

～LBS JAPAN TREK 2017 IN IIDA CITYを

事例として～

京都外国語大学 堀口 朋亨 准教授、学生

②学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの取組

静岡文化芸術大学 高島 知佐子 准教授

[基調報告Ⅱ 活動紹介]

地域人教育の取り組みについて

飯田OIDE長姫高等学校 Sturdyegg

[フリーディスカッション]

ファシリテーター：立命館大学 平岡 和久教授

議論提起：法政大学 石神 隆教授

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、「産業振興と人材育成の拠点」活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する情報共有などを行った。2日間で、26大学46名のメンバーが参加した。

○平成30年度学輪IIDA全体会

(平成31年1月26～27日)

「公開セッション」では、高等学校による活動紹介、大学連携の事例報告、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告及び「知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について」をテーマにしたフリーディスカッションを開催した。

[高校の活動紹介]

En e - 1 G P S U Z U K Aの取り組みについて

飯田OIDE長姫高校原動機部

[大学連携の事例報告《ポスターセッション》]

[全体討議]

テーマ：知のネットワークの活用による地域人財
育成の可能性について

ファシリテーター：和歌山大学 藤田 武弘 教授

事例報告：立命館大学 平岡 和久 教授

名城大学 福島 茂 教授

松本大学 田開寛太郎 専任講師

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、産業振興と人材育成の拠点（エス・バード）、飯田市域学連携交流施設の視察と活用に関する情報共有、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、26大学36名のメンバーが参加した。

3 学輪IIDAプロジェクト会議の設立

(平成23年3月23日)

平成23年1月の大学連携会議において確認された提案、課題、意見等を踏まえ、今後実現可能な取組等について議論し、具体的な方向性を見出すことを目的に開催した。

学輪IIDAにプロジェクト会議を設置し、旧飯田工業高

校の利活用、地域課題にテーマにした共同研究の実施、学輪IIDAウェブサイトの構築などに取り組んでいくことを確認した。

○旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の設立

(平成23年9月12日)

旧飯田工業高校の「教育施設としての活用可能性」について、様々な角度から検討することを目的に設置された。南信州・飯田フィールドスタディなど現在の大学連携の取組からの積み上げと、リニア時代を意識した大学的な機能の2つの視点で検討していくことを確認した。

プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「飯田工業高校後利用プロジェクト報告」(追手門学院大学社会学部：小畑力人教授)を参照。

旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の主な取組(歩み)は、以下のとおり。

(平成23年度)

プロジェクト会議を設立するとともに、大学院大学の設置可能性検討に向け、岐阜情報科学芸術大学院大学を視察した。また、プロジェクト会議の趣旨や検討状況について、学輪IIDA全体会公開セッションで報告するとともに、内部討議にて今後の取組について意見交換した。

(平成24年度)

旧飯田工業高校の教育的な施設の活用の可能性について検討した。旧飯田工業高校の後利用検討に向けては、「飯田で何を学ぶのか」といった理念やコンセプトの検討が重要であること、その理念やコンセプトを実現に向け教育目的の達成に必要なカリキュラムの構築が必要であること、及びその教育を実践するために必要な施設の有効な活用について検討することが重要であることが確認された。

また、リニアを活かした大学的な機能の視点として、共同教育課程、連合大学院、大学院大学の設置可能性などについて調査、研究していくこととした。

(平成25年度)

旧飯田工業高校施設が、目指すべき地域像の実現に向けた地域振興や人材育成の拠点となることが重要であるとの認識のもと、その役割を担うことができる教育・研究施設(機関)としての活用可能性について検討した。旧飯田工業高校を活用した教育・研究施設(機関)には、新しい価値を創発していく機能(価値創発機能)や新しい形の大学機能が必要であるとの認識のもと、様々な人材、知識、経験、情報等が交差する「ナレッジ・スクエア」構想と、そ

の活動に必要とされる施設のあり方について整理した。また、ナレッジ・スクエアとしての活用や実践を経て、将来的には高等教育機関(大学院大学)やコンベンション施設の設置可能性について検討した。

(平成26年度)

旧飯田工業高校を活用したナレッジ・スクエア構想について引き続き検討した。また、飯田市が実施した「大学院大学設置可能性調査事業」の一環で開催した「南信州における高等教育機関のあり方について考える」シンポジウムにおいて、旧飯田工業高校を研究教育施設として活用する具体案としてナレッジ・スクエア構想と大学院大学の設置可能性について発信した。

(平成27年度)

旧学校施設を活用した類似施設の調査として、「三鷹ネットワーク大学」と「IID世田谷ものづくり学校」の視察を行い、地域との親和性、学校施設を使用することの意義、施設運営には多様な主体の積極的な関わりが重要であること等を確認した。

また、学輪IIDA全体会内部討議にて、南信州広域連合を中心に検討してきた旧飯田工業高校利活用構想案「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の知の拠点整備構想案」の考え方と、プロジェクト会議にて導き出した「ナレッジ・スクエア構想」の考え方の親和性を確認するとともに、これまでのプロジェクト会議を引き継ぎ、知の拠点形成に向け検討するプロジェクト会議を設置することを確認した。

○知の拠点プロジェクト会議の設立

(第1回プロジェクト会議：平成28年3月5日)

第2回プロジェクト会議：平成28年10月8日)

旧飯田工業高校施設を活用した知の拠点の形成に向け、学輪IIDAに有志メンバーによる「知の拠点プロジェクト会議」を設立した。

第1回プロジェクト会議では、知の拠点の全体像、知の拠点の機能を高める「共創の場」、地域振興の知の拠点や大学サテライト・研究室のあり方などを中心に意見交換した。またプロジェクト会議として、知の拠点の目指す姿やその実現に向け、引き続き情報等共有しながら検討を進めていくこと、リニア時代を見据えこの地域にどのような知の拠点が必要であり、そこで如何にして魅力を形成し人財を引き寄せる磁力を形成し発信していくかなど、本質的な議論を進めていくことを確認した。

第2回プロジェクト会議では、第1回プロジェクト会議以降の旧飯田工業高校施設の利活用に関する検討経過や、施設所有者である県の方針決定や南信州広域連合の方針内容について説明するとともに、知の拠点の重要な機能

を担う共創の場のあり方等について意見交換した。

○共通カリキュラム構築プロジェクト会議の設立

(平成23年10月4日)

飯田に関わってきた大学研究者が有する飯田の価値を集約し、共有化した「モデルカリキュラム」の作成と実践を通じて、飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルを構築することを目的にプロジェクト会議を設置し、共通カリキュラムの基本的な考え方や今後の取組について検討、確認した。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの到達点と課題」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の主な取組(歩み)は以下のとおり。

(平成23年度)

●プロジェクトメンバーによるシラバス案の作成と学習会

プロジェクトメンバーが有している飯田の価値、関心事項を取り入れたシラバス案を作成。12月11日～12日にプロジェクト会議を開催し、各教員が作成したシラバス案の確認や学習会を開催する。

今後、シラバス案を元にしたモデルカリキュラムの作成と実践を、複数大学が連携しながら取り組んでいく方向性を確認した。

(平成24年度)

●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、しんきん南信州地域研究所及び市が連携し、大学の専門性と飯田でのフィールドスタディを組み合わせたモデルカリキュラム作成と実践に向け取り組んだ。地域の持続可能性に関する要素、要因を明確化するため、飯田のソーシャルキャピタル(社会関係資本)を可視化し、持続可能な地域づくりとの関係について検証する「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を、総務省の「域学連携」地域づくり実証研究事業の受託事業として実施し、3大学29名の大学研究者や学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「ソーシャルキャピタルを南信州・飯田で学ぶ」(名城大学 福島茂教授)を参照。

(平成25年度)

●地域環境政策フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、立命館アジア太平洋大学及び市の連携のもと、飯田における環境モデル都市の取組や多様な主体の実施体制を学ぶカリキュラム

として「地域環境政策フィールドスタディ」を実施し、3大学28名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「環境をテーマにしたモデルカリキュラムの作成と実践」(立命館アジア太平洋大学 銭学鵬准教授)を参照。

(平成26年度)

●南信州飯田ニューツーリズムフィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学及び市の連携のもと、農山村再生に資するツーリズムの新たな可能性を探るカリキュラムとして「ニューツーリズムフィールドスタディ」を実施し、4大学37名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第2号における「南信州・飯田ニューツーリズムフィールドスタディ(共通カリキュラム構築プロジェクト)の成果と課題」(和歌山大学 藤田武弘教授)を参照。

(平成27年度)

●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、飯田における社会関係資本の重層的蓄積を学ぶカリキュラムとして「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を実施し、4大学41名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第3号における「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ 2015」(東洋大学 小林正夫教授)を参照。

(平成28年度)

●地域経営論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、地域経営の概念、地域経営の現状、成果や課題、持続可能な地域の実現に向けた地域経営のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域経営論フィールドスタディ」を実施し、5大学50名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第4号における「『地域経営論フィールドスタディ』の実施報告」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

(平成29年度)

●地域文化論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学・静岡文化芸術大学及び市の連携のもと、飯田の人々の地域への愛着や帰属意識を地域文化の観点から明らかにすることを通じて地域活性化を実現するための地域アイデンティティの形成のあり方などを学ぶ

カリキュラムとして、「地域文化論フィールドスタディ」を実施し、5大学46名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第5号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト地域文化論フィールドスタディ 2017」（静岡文化芸術大学 高島知佐子准教授）を参照。

4 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会の設立 （平成30年度）

実行委員会は、飯田の価値の発見・共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認し、学びの体系化・「見える化」を進めることで、飯田や学輪IIDAの魅力を高め、新たな域学連携、大学間連携を通じて、地域と大学が共に学び合う場づくりや、高校と大学の有機的な連携の在り方の検討や実践的な展開等により、学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」へ繋げることを目指します。

取組の柱

「共通カリキュラムの本格的な展開」

「高校と大学の連携した取組の展開」

① ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・
下伊那農業高校・飯田女子高校・飯田風越高校
（大学生57名 高校生5名）
（外 一部参加高校生18名）

② 地域経済フィールドスタディ 2018

大月短期大学・静岡文化芸術大学・立命館大学
大学生 44名

③ 遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2018

京都外国語大学・東京農工大学大学院・
松本大学・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校
大学生・院生11名 高校生8名 教員9名）

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ及び遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディは、飯田の高校生も参加し、地域の学びを通じて大学生の学びを体感する機会となった。

（平成31年・令和元年度）

「高校と大学の連携した取組の本格的展開」

① ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

首都大学東京・同志社大学・東洋大学・名城大学・
立命館大学・
飯田高校・飯田女子高校・飯田風越高校・下伊那農業高校
大学生30名 高校生15名 教員7名
（外 一部参加高校生26名）

② アグリイノベーションフィールドスタディ

大月短期大学・立命館大学・和歌山大学・
飯田高校・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校・
下伊那農業高校 大学生53名 高校生24名
教員 13名（外 一部参加高校生1名）

③ 遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2019

東京農工大学・松本大学・
飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校・飯田風越高校
大学生・院生11名 高校生13名 教員7名

5 学輪IIDAウェブサイトの開設

（平成24年6月）

飯田市や学輪IIDAに参加している大学・研究者間の情報共有や、学輪IIDAの取組に関する情報発信を目的に、学輪IIDAウェブサイトを開設した。

ウェブサイトのURL <http://gakurin-iida.jpn.org/>

6 学輪IIDA機関誌「学輪」の発刊

学輪IIDAの取組や、大学研究者などの飯田における教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、より多くの方に知ってもらうことを目的に、平成26年度より学輪IIDAの機関誌「学輪」を毎年1回発刊する。

7 大学等の受入状況について

南信州・飯田フィールドスタディなどを通じて、当市に教育・研究・調査等で訪れた大学研究者や学生数

年度	大学数	参加者数
平成20年度	14	176
平成21年度	15	120
平成22年度	16	299
平成23年度	17	422
平成24年度	16	558
平成25年度	27	759
平成26年度	24	956
平成27年度	30	768
平成28年度	35	634
平成29年度	46	648
平成30年度	44	713
合 計	284	6,053

※参加者は延べ人数

大学連携会議「学輪IIDA」名簿

(敬称略 R1.12.25現在)

	氏 名	大学機関等名・学部
1	新井野 洋一	愛知大学
2	岩崎 正弥	愛知大学
3	黍嶋 久好	愛知大学
4	戸田 敏行	愛知大学
5	小玉 敏也	麻布大学
6	黒岩 長造	飯田女子短期大学
7	堀田 浩之	飯田女子短期大学
8	武分 祥子	飯田女子短期大学
9	岩崎 みすず	飯田女子短期大学
10	新海 シズ	飯田女子短期大学
11	宮國 康弘	医療経済研究機構
12	兼子 純	愛媛大学
13	若生 謙二	大阪芸術大学
14	青木 伸一	大阪大学
15	土井 健司	大阪大学
16	小畑 力人	大阪観光大学
17	榎平 龍宏	大月短期大学
18	大串 恵太	追手門学院大学
19	七田 麻美子	オープンサイエンスギルド
20	菊地 浩平	オープンサイエンスギルド
21	塚原 直樹	オープンサイエンスギルド
22	竹内 宏彰	金沢工業大学
23	伊東 理	関西大学
24	野間 晴雄	関西大学
25	西尾 恵理子	九州共立大学
26	西山 巨章	九州共立大学
27	尾上 百合加	九州共立大学
28	廣岡 裕一	京都外国語大学
29	中嶋 大輔	京都外国語大学
30	中川 亮平	京都外国語大学
31	枝元 益祐	京都外国語大学
32	影浦 亮平	京都外国語大学
33	宮木 いっぺい	京都産業大学
34	諸富 徹	京都大学
35	堀口 朋亨	国士館大学
36	木村 暁	国立遺伝学研究所
37	大石 雅寿	国立天文台
38	中村 聡志	山陽学園大学
39	渡邊 信彦	事業構想大学院大学
40	下畑 浩二	四国大学
41	高島 知佐子	静岡文化芸術大学
42	増田 幸宏	芝浦工業大学
43	大杉 覚	首都大学東京
44	蘭 信三	上智大学
45	飯島 真里子	上智大学
46	田中 清	信州大学
47	脇若 弘之	信州大学
48	柳原 正明	信州大学
49	佐々木 邦博	信州大学
50	中嶋 聞多	信州大学
51	上野山 裕士	摂南大学
52	河藤 佳彦	専修大学
53	佐々木 茂	高崎経済大学
54	片岡 美喜	高崎経済大学
55	村山 にな	玉川大学
56	仲川 直毅	中京学院大学
57	林 良嗣	中部大学
58	山下 亜紀郎	筑波大学
59	呉羽 正昭	筑波大学
60	伊藤 由希子	津田塾大学
61	大島 幸	津田塾大学
62	曽根原 登	津田塾大学
63	Franz Waldenberger	ドイツ日本研究所
64	Isaac Gagné	ドイツ日本研究所
65	Daniel KREMERS	ドイツ日本研究所
66	Jentzsch Hanno	ドイツ日本研究所

	氏 名	大学機関等名・学部
67	儀間 敏彦	東海大学
68	牧野 篤	東京大学
69	新藤 浩伸	東京大学
70	李 正連(イ・ジョンヨン)	東京大学
71	松山鮎子	東京大学
72	瀬田 史彦	東京大学
73	友田 清彦	東京農業大学
74	寺内 光宏	東京農業大学
75	千賀 裕太郎	東京農工大学
76	土屋 俊幸	東京農工大学
77	朝岡 幸彦	東京農工大学
78	榎本 弘行	東京農工大学
79	澤 佳成	東京農工大学
80	竹本 太郎	東京農工大学
81	井口 貢	同志社大学
82	多田 実	同志社大学
83	有井 健	同志社大学
84	小林 正夫	東洋大学
85	蜂谷 充志	常葉大学
86	大貝 彰	豊橋技術科学大学
87	井上 隆信	豊橋技術科学大学
88	松島 史朗	豊橋技術科学大学
89	浅野 純一郎	豊橋技術科学大学
90	辛島 一樹	豊橋技術科学大学
91	劉 一辰	豊橋技術科学大学
92	禹 在勇	長野大学
93	加藤 博和	名古屋大学
94	中村 英樹	名古屋大学
95	エマニエル・レイト	名古屋大学
96	大濱 裕	日本福祉大学
97	江原 隆宜	日本福祉大学
98	高柳 俊男	法政大学
99	曾 士才	法政大学
100	大西 亮	法政大学
101	小門 裕幸	法政大学
102	酒井 理	法政大学
103	石神 隆	法政大学
104	西澤 栄一郎	法政大学
105	図司 直也	法政大学
106	白戸 洋	松本大学
107	田開 寛太郎	松本大学
108	福本 拓	宮崎産業経営大学
109	竹本 田持	明治大学
110	横井 勝彦	明治大学
111	小川 智由	明治大学
112	水野 勝之	明治大学
113	大友 純	明治大学
114	佐々木 宏幸	明治大学
115	福島 茂	名城大学
116	井内 尚樹	名城大学
117	阿部 治	立教大学
118	野田 健太郎	立教大学
119	井出 万秀	立教大学
120	銭 学鵬	立命館アジア太平洋大学
121	JONES Thomas Edward	立命館アジア太平洋大学
122	須藤 智徳	立命館アジア太平洋大学
123	森 裕之	立命館大学
124	平岡 和久	立命館大学
125	佐藤 龍子	龍谷大学
126	藤田 武弘	和歌山大学
127	尾久土 正己	和歌山大学
128	大浦 由美	和歌山大学
129	藤井 至	和歌山大学
130	山本 由美	和光大学
131	早田 幸	早稲田大学

※上記のほかオブザーバー参加の大学研究者もいらっしゃいます

学輪IIDA 機関誌「学輪」 一投稿規程一

制定 平成26年4月1日
改定 平成27年4月1日

1. 掲載論文の原則

- (1) 掲載原稿は、依頼原稿と投稿原稿に分けられる。
- (2) 投稿原稿のカテゴリーは、原則として「論文」「論説」「研究ノート」「調査報告」「講演記録」「その他」とし、依頼原稿においては、編集委員会において適当なカテゴリー設定をできる。また、投稿原稿については、上記のカテゴリーでは適応できないと判断できるものについては、執筆者と編集委員会において適切なカテゴリーの設定をできる。
- (3) 掲載原稿は、日本語によるものとする。但し、事前に編集委員会が認めたものはこの限りではない。
- (4) 依頼原稿は、編集委員会における編集方針のもと編集局より依頼する。
- (5) 投稿原稿「論文」については、査読に付す。「論文」以外のカテゴリーの投稿原稿については、編集委員会が採否を決定する。
- (6) 執筆要領については別途定める。
- (7) 原稿の掲載について判断は編集委員会で行う。
- (8) 依頼原稿については、掲載ページ1頁につき1,500円の原稿料を支払う。
- (9) 査読については、1原稿5,000円の査読料を支払う。
- (10) 事務局が特約を締結した場合を除いて、掲載原稿の著作権は学輪IIDAに帰属する。但し、執筆者自身は、当該原稿について自由に利用できる。なお、その場合、利用箇所、掲載し、発行年月等を速やかに事務局に報告しなければならない。

2. 投稿の条件

- (1) 学輪IIDAのコンセプトに合致した内容であること
- (2) 原稿は未発表のものに限る。但し、既掲載であっても編集委員会もそれを認め、現掲載箇所を示した場合はその限りではない。
- (3) 投稿原稿は、学輪IIDAの構成員又はその指導する大学院生若しくは大学院修了者によるものとする。共著の場合は、筆頭著者が当該要件を満たす必要がある。
- (4) 学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学院修了者が投稿する場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。当該指導教員は、その承認を与えるに当たり、本紀要の掲載に耐えられる内容で

あることを確認しなければならない。

3. 投稿原稿の内容

飯田市における取り組みに関する研究の成果及び特定の地域・資料等の調査結果に関する報告、又は上記以外で、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」という学輪IIDAコンセプトの推進に寄与するもの。

4. 投稿原稿の採否

投稿原稿「論文」は、査読に付す。査読実施の要領については以下に示す通りである。

- (1) 査読は、2名で行う。査読者は編集委員会における協議の上、編集局より依頼する。なお、査読者のうち最低1名は学輪IIDAの構成員とし、学輪IIDAの構成員以外のものに査読を依頼する場合は、編集委員会は学輪IIDAの趣旨及び査読要領を了解できる者を選任することとし、編集局は査読者に対してその旨周知する。
- (2) 査読者は、次の点に留意して査読をする。
 - 1) 原稿条件に合致しているかどうか
 - 2) 誤字、脱字がないかどうか
 - 3) 他の文献等からの無断引用、剽窃、出典の不記載など著作権をしていないかどうか
 - 4) 執筆要領に反していないかどうか
 - 5) 著しく論理性を欠くなど掲載に耐えられないものでないかどうか
 - 6) 査読者との見解の相違や新規性のある着眼点であったり、提言、発想等であることにより成熟性が欠けることを理由に、当該原稿を否定したり、新たな展開の可能性の芽を摘んでいないかどうか
- (3) 査読者は、投稿原稿につき、「掲載」、「修正後掲載」、「改稿後掲載」、「不掲載」の判断を編集局に通知する。また、査読者は「修正後掲載」の場合その箇所を、「改稿後掲載」の場合はその理由及び改稿のための指針、「不掲載」の場合はその理由を付して通知しなければならない。編集局はその結果を執筆者に通知する。なお、「掲載」はそのまま掲載を可能し、「修正後掲載」は、修正箇所が修正されているかを編集局で確認の上掲載する。この場合この時点で「掲載」と判断されてものとする。また、「改稿後掲載」については再度査読に付す。
- (4) 2名の査読者のうち1名が「掲載」と判断した場合は、掲載を認めるものとする。但し、執筆者においては、他の判断の理由を考慮してその範囲において一部改変することを可能とする。
- (5) 上記にかかわらず「掲載」が認められない場合は、執筆者は編集委員会に異議申し立てをすることができる。但し、学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学

院修了者が異議申し立てをする場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。

(6) 前項の場合、編集委員会は、査読者及び執筆者の主張を考慮して、掲載についての判断を行う。なお、必要な場合は、対質の場を設定することができる。

(7) 査読者は匿名とするが、前項の対質を行う場合は、この限りではない。

5. 投稿手続き

投稿者は、正本1部、副本2部、および電子データを本学会編集委員会宛に提出する。

6. 経費負担

投稿料は徴収しない。ただし、刷り上がり頁数が執筆要領に記した上限頁数を超えた場合には、1頁あたり3,000円の超過料金を請求することがある。また、図版の作成し直しや特殊な印刷を必要とする場合、著者に実費を請求する。

7. 校正

著者校正を原則とする。必要に応じて編集委員会が校正を行う場合がある。

8. 抜刷

50部は無償配布する。それ以上必要な場合は、実費請求する。

学輪IIDA 機関誌「学輪」 一執筆要領一

制定 平成26年4月1日

1. 原稿の構成と書式

投稿する原稿の執筆に当たっては、原則としてワープロまたはパソコンを用いて作成すること。

また、原稿はA4用紙を用い、表紙・本文・注・参考文献・図表・要旨で構成する。各構成要素の書式は以下のとおりである。

- (1) 表紙：表題・著者名・所属（原則1つ。ただし編集委員会が認めた場合はこの限りでない）・キーワード（5つ以内）を日本語と英語で記載する。書評については、キーワードのかわりに対象論文、書籍の書誌情報を原著の言語で記載すること。また、投稿原稿の種別についても明記すること。
- (2) 本文：日本語の場合、横書きで1頁あたり40行×40字で印刷する。外国語の場合はこれに準じた分量で印刷すること。
- (3) 注：番号順に掲載し、本文中の該当箇所に番号を付すこと。使用しない場合は省略することができる。
- (4) 参考文献：書籍の場合は「著者名・署名・出版社名・発行年」、論文の場合は「著者名・論文名・雑誌名・巻号・頁・発行年」に関する情報を必ず記載し、アルファベット順に並べて掲載すること。ただし、文献の挙示は著者の採用する方式に準拠するものとする。使用しない場合は省略することができる。
- (5) 図表：本文中に出てくる順に、注とは別に番号を付与し、本文中の該当箇所にあらかじめ表示するか、該当箇所を指示すること。ただし、図と表の両方を使用する場合は、それぞれで番号を別に付与すること。使用しない場合は省略することができる。
- (6) 要旨：日本語の場合は400字以内、外国語の場合はこれに準じた分量とする。

2. 原稿の分量

刷り上がり頁数で、10頁を上限頁とする。1頁の刷り上がりは26字×47行×2段（2,444字）である。この長さを超えるものでも、編集委員会が必要と認めた場合は、掲載することがある。ただし、上限頁を超えた場合には、投稿規程に従った超過料金を請求することがある。

【執筆者一覧】

(掲載順)

佐藤 周平（東京農工大学大学院農学府）
土屋 俊幸（東京農工大学大学院農学研究院教授）
竹本 太郎（東京農工大学大学院農学研究院講師）

能塚 康介（東京農工大学大学院農学府）
朝岡 幸彦（東京農工大学農学研究院教授）

【通信欄】

学輪IIDA機関誌「学輪」は、大学研究者等の皆様にご協力いただきながら、学輪IIDAの取組や大学研究者等による飯田に関する教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、その内容を広くお知らせすることを目的に、2014年度に創刊し、以後発刊を重ねてまいりました。

第6号の発刊にあたりまして、ご投稿いただきました皆様をはじめ、作成にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

今後、機関誌「学輪」がますます充実したものとなりますよう皆様からの投稿を心よりお待ちしております。

【編集委員】

平岡 和久（立命館大学政策科学部）
福島 茂（名城大学都市情報学部）
小林 正夫（東洋大学社会学部）
廣岡 裕一（京都外国語大学国際貢献学部）
上野山裕士（摂南大学教育イノベーションセンター）
藤田 武弘（和歌山大学観光学部）
藤井 至（和歌山大学観光学部）

【編集局】

和歌山大学観光学部
編集局長 藤田 武弘
編集局 藤井 至

【事務局】

飯田市 総合政策部 企画課
大学・三遠南信連携係



大学連携会議「学輪IIDA」

機関誌「学輪」

第6号 2019

(年1回発行) 2020年1月発行



発行

飯 田 市

395-8501 飯田市大久保町2534番地

0265-22-4511

<http://www.city.iida.lg.jp>



印刷所

龍共印刷株式会社
